

---

# 枕営業

may.honda

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

枕営業

### 【Zコード】

N8809Y

### 【作者名】

may·honda

### 【あらすじ】

普段から眠たくてしおうがない高校生の竜崎広界。

彼はバイトしながらせつせと高校生活をおくっていた。

妹の奈緒やダックスの飼い犬のフォンスにオタクな加藤健介、個人的にかかわりたくないクラスの女子、藤咲誇紫に姉思いの妹の藤咲花桜梨と出会つたり、こんなありがちで眠くなるお話が続く。

（縦読みの方がいいと思います）

## プロローグ（前書き）

初めて書き終えた作品です。

元々は、もうちょっと改稿してラノベの賞に送りつとしてた作品です。

センスのなさに投稿するのをやめました。

読んでいて苦痛を感じると思うのでどうな人は、遠慮ください。

Wordで書いたのをtexに変換して出したのでルビについては

後ろのを見る感じにしてください。

## プロローグ

「あーあ、ねむい」

竜崎<sup>りゅうざき</sup>広界<sup>こうかい</sup>はいかにも徹夜<sup>てつやく</sup>しちゃって寝てませんといわんばかりの眠氣<sup>みんき</sup>たっぷりの大あくびをしながらつぶやいた。

「コウちゃんはいつもそうだろ。授業中も寝てばかりで隣で一緒に登校していた親友の加藤健介が呆れながら声をかけてきた。

「眠いもんは眠いんだよ。グッスリ眠れるやつはいいよなー。何にも考えないで寝られるとだもん」

「聞くけど、お前は何か考えてんのか？ 僕にはちつともそんな感じには見えないぞ」

「俺だつて色々と考えてんの！」

「色々ってなんだよ。青色とか赤色とかそんなこと聞いてないからなら。ましてや前の女

子のパンツの色とか聞いてないからな

「それは……。あ、おはようございまーす」

竜崎は加藤に先を読まれて返答に困つていると、ちょうどタイミングよく高校についた

ので、校門の前に立つていた教師陣に挨拶をした。

「おう、おはよう。おい、お前はいつも眠そうな顔してんな。この前のテストとかでも

成績が悪くなかったから俺たち教師は寝ていても何も言わないけど、体には気をつけるよ」

体育教師の権藤<sup>けんとう</sup>が体の心配をしてくる。

「そうですねー。体力バカとか単なるバカみたいな権藤先生とは

違うんで、風邪をひかないように気をつけないといけないですね

「風邪をひかないのをそんなに褒めるなよ。俺を褒めても何もでないぞ?」

と、あるワードには全く耳に入らないのか「――」しながら会話を続けようとしていた。

「これ、他の生徒から没収した工口本だけど、こりゅか?」このオッサン何とかしないとダメだ、と龍崎は思ったが、彼自身には何もできないので

普通に話を続けることにした。

「先生が何をプレゼントしようとしてるんですか。しかも、それは生徒から没収したものでしょ」

彼は呆れて溜め息混じりに言葉を返す。

「そのまま校則通りに焼却炉に連れて行くよりかは本こといつてマシだろ」

権藤はなぜかマトモなことを龍崎へ言に返していく。

「それだったら、アニメとか漫画みたいな工口本は「ハイツ」にあげてください

俺は隣にいた健介を親指で指さした。

「そうか、加藤はそんなにこれが欲しいのか?」

一生懸命頷く加藤。

「ん~」

権藤が唸つ<sup>うな</sup>ている。

龍崎は当然、軽いノリで「あげる」と言つたことを後悔しているんだろうと思つていた。

もしくは「校則に従う必要はない」と暗に宣言してしまったことを悔いでいるのだろうと感じた。

「やる。持つてけ。一弾でいいよな?」

権藤は気前よく加藤に本を手渡した。

「あげるんですか？ 嘘つてるからやつぱり無理とか当然のこと

を言つのかと思つてしま

したよ

「嘘つてたのは何冊あげるかつてことだ」

竜崎は本当にこの先生がクビにならないのか心配した。

そのまま加藤は貰い、真新しい白い校舎に足を踏み入れ一緒に教室へ歩いていった。

「恩にK.I.」

「誰を殺すつもりだ。もらつたカトケンが持ち主に殺されるわ。ま、本はいつも借りて

るお礼だよ」

「そうか。次も遠慮なくいってくれ。喜んで貸してやる」

「おう、頼むぜ」

加藤は本を手にし、見るからに喜んでいた。

竜崎も加藤同様喜んでいたが、それは次も貸してもらえることを確約しているからだ。

だが、彼は少し気になつたことがあつたから加藤に尋ねた。

「ところで、なんていうタイトルなんだ？」

「この本かい？」

加藤は二ンマリとした顔をつくり、なぜかもつたいてぶつっていた。

「早く教えてくれよ」

「教えなーい。それで次はどの人のグッズが欲しいんだ？ それとも薄い本か？ 手持ちにあるのなら何でもやるぞ」

胸を張るようにして加藤は言つてきた。

「いや、いつ俺がカトケンの持つてるグッズとかが欲しいとか言った？ しかもタイト

ルを教えてくれないし、いつのまにか一回は借りてる」とになつて

るしさ……」

持つべきものは友だと一瞬でも思った竜崎は溜め息を吐いた。

「いつも借りてんのはカトケンが使ってる授業用のノートだよ」

「やっぱり、『ウちゃんはノートがお気に入りみたいだな。あの

絵師の絵は良いよな

「ちげーよ。絵じゃない！」

「え？ ケンちゃん特性オリジナルノートに描いてあるキャラの絵が見たかったんじゃないの？」

「自分でチヤンを付けるなよ。それにいつ俺は絵が見たいと言つたんだ」

竜崎は自分の趣味を捻じ曲げられて、勘違いしている彼に立ち向かつた。

「俺は、カトケンの授業のノートの中身が欲しいの」

「これかい？」

加藤がカバンから取り出したノートには『おしえなーい。私と彼の秘密』なるタイトル

ロゴとイラストが描いてあった。イラストは男の娘と男の子が向きあつているもので、とてもその辺で売っているようなものではなく、貼り付けて作成している感じがした。

ともかく竜崎は加藤からいじわるされたのではなかつた。

そんな会話をしつつ、教室に入り席に着く一人。

その後もホームルームをはさみ話題に事欠くことなく会話し、授業が始まった。

必死にノートを取る加藤。

必死に惰眠をむさぼる竜崎。

昼になつたら体重などを気にしながら考えて食べる健介。

昼になつたら眠気を誘発するかのように満腹まで食べる広界。

そして午後の授業でも同じような光景が見られた。

竜崎は居眠りをして教師にチョークを投げられようとも、出席簿

で叩かれそうになろう

ともすつと田を覚まして、抜群の反射神経で寸前のところでいつも捕るか避けるか受け止める。

教師たちは、なぜこんなにもやる気を感じられない生徒が、他の生徒ができないさすぎと いうことではないのにあれだけの好成績を取っているのか不思議でならなかつた。

彼は学年で200人の内、必ず50番以内には入つてくる。授業中はほとんど寝ているにも関わらずである。

一方、その友人の加藤はトップ10には確実に入つてくる。教師陣の多くは加藤に山のはり方と勉強を教えてもらつていてではないかと思つてゐる。それが事実だとしてもカンニングなどの不正行為をしているわけではないので注意するわけにもいかない。

それに高校生活で友人関係を築くのも大切であるので口出しするわけにもいかなかつた。

そんなこんなで学校が終わり、友人達とも別れ帰宅途中の二人。

「コウちゃん今日もバイト？」

「そうだよー。その前に犬の散歩にいかないと」

「そうか、フォンス君いるもんな」

「コンコン。あ、俺こつちだから、また明日」

独特のあいづちを打つと竜崎は手を振り自分の家へ足を向けた。

竜崎はごく普通の一軒家の前に立つと門をくぐり鍵を使い玄関の中に入る。

「ただいまー」

「おかえりー」の声を確認してから着替えるために自分の部屋に入る。

その途中でチラつと見えたリビングでは犬が気持ちよさそう

ファーの上を占拠して

いた。片耳を立てようとするともやわらかい垂れ耳なので持ち上がりず、耳をピクピクさせ、

片目だけ開けた目でこいつを向き、竜崎であることを確認するとまた眠りにつく。

自室で私服に着替え、リビングで寝ていたダックスのフォンスを起こし、散歩に連れていく。

「おい、帰ってきたんだから、ドアの前でしつぽ振つて嬉しそうに腹を見せて待つぐら

いしりよな」

犬にブツブツつぶやいていたが、返事はもちろん返つてくるわけがない。

首にリード付きの首輪を装着し、家の外にでた。

竜崎はそのまま公園へ歩いて行こうとするが、何かが重い。

犬が座り込んで歩かない……。

「今日は行かないよ、絶対に行かないよ！ テコでもゲコでも使つたつて動かないよ」

フォンスはそんな気持ちでカエルのようにお尻を落として座る竜崎へ上目使いで訴えるが、そんなことはお構いなしに竜崎は強引に引っ張る。

それでも動かない。

フォンスは気分屋で歩く時と全く歩かない時がある。

今日はどうやら歩かない日を引いてしまったらしい。

竜崎はしょうがないなと思い、抱っこし途中まで歩く。

しばらくして、公園に行く途中の住宅街の中で降ろすと今度は歩き始めた。

やつと散歩ができると思い、ホッとするとそのまま家まで歩いてくれた。

家につくとまづ、フォンスの足を洗い、リビングの中にあげて水を与え、竜崎はバイトのために自転車に乗り家を出た。

## 相談屋の人とダイエット

### 第一章) 相談屋の人とダイエット

1

彼のバイト先は相談屋などという、いかにも胡散臭い商売であるが、なぜかお客様がよく来る。

今日の龍崎の担当は3人だった。

1人目のお客さんは花咲桃子はなざき ももこという事前にもらった資料には高校生とある。同じ高校生

の龍崎が見ても派手な印象を「える若い女性だった。

「最近、彼との仲が悪くて……」

彼氏と別れそうになつて「るらしく」龍崎の目から見ると相談内容の割にはとても深刻  
そうな顔をしていたが、龍崎にしてみれば、付き合つていてる人の話  
なんてはどうでも良かつた。逆に彼はこの女性の彼氏に彼女ができたのか相談を受けながら問い合わせたくなつて  
くる。

「えつと、彼との出会いは?」

「バイト先で知り合つたんです」

「バイト先だとそんなに異性と知り合えるんですか?」

龍崎は自分のバイト先で出会いがないのでバイトの転職も含め、期待して聞いてみた。

「はい、彼が常連で私が接客をして、そのついで手紙を渡されて  
彼女は懐かしむような顔になった。

「私、高校生なんですけど、あんなに真っ直ぐな手紙をもらつた

のは初めてで……」

「そうですか。そのままの気持ちを伝えればいいんじゃないですか」

「そうですね！ やってみます」

女性は龍崎の簡単な言葉が耳に届いたのか自信を持ったようだ。龍崎自身はこれくらいなら友達に相談すればいいのには口にはださず、見栄つ張りな

のか知らないが、聞くわけにはいかないかつたのだろうと推測する。この顧客が大人になり、もつと金のなる木に成長するのを待つ。

「連絡先を教えるので、できれば私に誰かバイト先か高校の人を紹介し」

龍崎は仕事を放棄氣味にそんなことを口にしていたが、彼女が途中で遮った。

「彼が年上で10歳離れてても関係ないですよね。ありがとうございました」

龍崎の話が終わる前に彼女はそつそつと話を切り上げると、気分良さそうに部屋を出て

行つた。その姿を龍崎は眺めていた。

「絶対、後悔させてやる。警察に電話してその彼氏をムショに入れてやる」

龍崎は悔しさからそんなことをブツブツ呟えている。

だが、残念ながらそのようなことはできるわけがなかった。

仮名と本名が選択でき、住所も細かい職業もプライバシーの観点から相談員にはある程度までしか知らされないからである。

そのすべてを知るのは店長のみであるという、ボロい店の割にはなぜかその辺りをしつかり守っていた。

休憩の時間をあけ、次の客は花村真寝得（加盟）と書かれたいた。

竜崎は全国マネー大

好き協会にでも加盟しているのかと一瞬考えたが、99%仮名の誤字である。

メガネを着用し、小太り。

会社の中堅かなと勝手に予想していた。

「実は会社のお金を使いこんでしまって……」

コンコンと竜崎特有のあいづちを打ちながら花村の話を聞いていく。

具体的には会社のお金で豪遊をしてしまったらしい。

簡単に言つと、会社のお金でお酒を飲む場所で遊び呆けたり、アニメのグッズなどを買

いまくつたりしてしまったらしい。

「使つたお金を返せばいいと思いますよ。親戚に借りるなどして

竜崎は单刀直入にど真ん中へ投げ込む。

「返せたらとっくに貸してる。それで解決しているのならコンビニはこない」

と、すっぽ抜けて暴投になつていないので花村は怒つていて。ど真ん中は自分の好きなコースではなかつたらしい。

だが、よく考えれば会社のお金を使つてしまつた方が悪いのではないか。

普通の人ならそう思うが、竜崎達の仕事ではそれを言つてしまつてはお終いしまといふのが辛いところである。

「じゃあ、地の果てまで逃げればいいと思いますよ  
あつけらかんとした感じで答えた。

「ふざけてるのか君は」

そこまで言うと花村は少し赤くなり机を叩きながら言つてきた。

「その金はどこから来ているんだ。それに地の果てつてのはどこ

なんだ」

ますます花村は顔を真っ赤になつてきた。

そんな深刻な相談をどこに馬の骨が経営してゐるのかもわからない  
ような場所でされても  
困るのだが、竜崎はそんな疑問を持たずに突き放すようにズバッと  
こう言い切つた。

「それなら皆さんご存じの地獄にでも逃げればいいんじゃないで  
すか？ 追つてくる人  
もめつたにいませんし。オススメですよー」

聞いた花村は真っ赤を通り越して、顔が青ざめた。

「逃げる経費も安いですし、丈夫なヒモ一本で逃げられますよー。  
ひもを使うのなら電  
車に飛び込むより、人の迷惑になりませんし。それにもう悩みで苦  
しむこともなくなりま  
すしね」

花村はその話を聞くと、手で押すと倒れそうなぐらうにフラフラ  
になり、席を立とうと  
した。そんな花村に竜崎は両肩を掴んで座らせ、皿をジッと見つめ  
てこう言った。

「でもさ、そんなことやって、どうするの？ あなたがそれを実  
行すれば、あなたはこ  
れ以上苦しまずに楽になるかもしれない。でも、他の人のことはどうすんだ？ あなたが

首を吊つてるのを目撃した人のショックは？ 奥さんとかいるのな  
ら奥さんが死んでしま  
つたあなたをどう思うんだ？ それに父として慕つてくれている子  
供は？ それに使い込  
んまれてしまつた金を会社はどうすんだ？」

「あなたの人生は終わつても周りの人の人生はこれからも續くん  
にここまで一気に相手の身勝手さを諭した。

「あなたの人生は終わつても周りの人の人生はこれからも續くん

だぞ」

と、言つてから最後にこいつ付け足した。

「諦めるな。必死に自分は何ができるかを考えるんだ。しつかり考えたらまた来なさい。

その時はその道のエキスパートに受けるように頼んでおくから。」

金にならなさそうな木ならせて廃材として使つてしまおう。

そんな店の考えを知らずに花村はポロポロ涙を流したままこの部屋を後にした。

休憩をはさみ、今日の最後のお客さん、藤咲さん<sup>ふじさき</sup>の番になつた。

彼女は何かやつれている印象だつた。

何よりも元気がない。

笑顔を見せれば、明るくかわいい印象を与えられるのにもつたないなど龍崎は感じた。

「こんばんは。それじゃ座つてください」

龍崎は席へ座るように促した。

「それでご相談内容というのは?」

「最近、ダイエットを始めようとしたら、無理やり食べさせられている夢を見たん

です。それ以来、食欲がなくて……」

コンコンと、あいづちを打ち話を聞いていく。

ダイエットを希望していたのに食欲を無くしたら相談に来るというふざけた話だったが、

彼女は真剣な顔だつた。

「具体的にはどんな夢だつたんですか?」

「とにかく太つていて、気持ち悪い容姿のおばけみたいのに食べさせているんです……」

彼女はその容姿を頭に思い浮かべて身震いをしている。

「そうですか。怖い夢でしたね。ちょっと気持ちが疲れちゃつてるのかな」

「その夢を見て以来全然、『ご飯が食べられないで……』

彼女は今にも泣き出しそうだつた。

「正夢みたいに夢に出てきた」ことが現実に起じるわけじゃないんですけど、何か影響して

てるようで怖くて……」

それを聞いた瞬間、竜崎の瞳孔<sup>ひとのくき</sup>が開いた。

それから今までの話も含めてメモを執り、竜崎も前の一人とは比べられないほど真剣に

聞き耳を立てた。

今までにもそのような夢を見たのか、なぜ現実に影響してると感じたのかなどの質問も

竜崎の口から出た。彼女は前者のみた内容についてはまつきと答えたが、後者の質問には

はあいまいにしか答えられていなかつた。

「今日はとりあえず帰つてゆつくり休んで、また同じ夢をみたら来てください」

話を聞き終えた竜崎はそういつて、彼女を帰した。

店の片付けを終え、店長に挨拶と報告をして竜崎は帰宅した。

家につくと風呂に入り、一人遅い夕食を食べ、犬の小便用のペッシュティー<sup>ペッシュティー</sup>とフォンスが

飲む用の器に水を入れ、それを持ってフォンスを連れ自分の部屋に入つた。

フォンスとはいつも一緒に寝ている。

今日も布団の上に乗つたフォンス既にかわいい寝顔を見せて寝ている。

竜崎も横になつているとウトウトしてきて、とうとう寝てしまつた。

「おい、もつといいもん食わせりー。夕飯の時にこじらせつて言つたじやん」

「うるせー。贅沢言つな。夕飯の時はバイトだつたから他の人に言え。それにいいもん食いたかつたら、普段からもつと歩け」

俺は森の中のポツカリと空いた場所で隣に話かけられた。

「気分がのらなかつたんだよ。あと、歩きたくないのに無理に引つ張つていくなよ。法

律にのつとつて真正面から訴えるぞ。」

引っ張られて歩かされたら誰でもむかつくはずであることは俺でもわかっている。

「うつさい。とつと歩かないお前が悪い。」

相手の気持ちなんて考えずにそんな言葉を返す。普通に俺は会話を続けているが、話しているのは間違いなくフオンスといつ名の我が家に住んでいる犬である。

「そもそも、何でワシがお腹を見せて、お前を出迎えないといけないんだ？ ふざけるのもいい加減にしてよ」

「嫌なら出てけよ」

「追い出すな。噛むよ？」

「おうおう、やつてみる。それこそ家から追い出してやるからなぜか夢の中ではこの犬は喋る。

「それで今日はどの化け物なの？」

「大量に食べさせられている夢だつてさ。それで本人は少しあつれて食欲不振だ」

「実際に夢を見てみないとわからないわけね」

「そういうこと」

夢の中ではフォンスは会話ができるが、容姿は垂れ耳につぶらな瞳の普通のダックスのままである。

「それで匂いはするかい？」

フォンスはクンクンと鼻を上下に微妙に動かし、匂いを嗅いでいる。

「お前の1週間洗つてない匂いを嗅ぐんじゃないぞ？」

俺の余計なひとことを無視してフォンスはチラリと睨み、先へ行こうとする。

「こっちに変な臭いがあるな。ついてきて」

気がつくとできていた森の中の一本道をフォンスの後を追つて走つていく。走るにつれ

段々と甘い香りが辺りを包んでいくのがわかる。

やがて、森の中に童話の世界でしか見たことがないお菓子の家が現れた。

「あれか？」

フォンスに尋ねた。

「あそこから怪物と人の匂いがする」

「そうか、さすが鼻だけはいいな」

「人の何倍も嗅覚がいいからね。まかせてよ」

フォンスは褒められてうれしそうな顔をした。

「お前は犬の中でも特に頭が悪くても鼻だけはいいからな」

わざと付け加えた余計なひと言にフォンスは上機嫌な気持ちは一瞬で終わつた。

「今すぐ現実に帰つて口におしつこをひっかけるよ」

「それだけはやめる。一階の窓から放り投げるぞ」

フォンスと無駄口をたたきあつている間にも俺は、薄い飴細工でできた透明に近い窓から中の様子を窺つた。

その家の中にはテーブル前の華奢で同じ年ぐらいの女子と五重ア

あやしや

## 「」の巨大な怪物が鎮座

していた。怪物に何かを脅されているみたいだつた。

「あれか。確かにあれは思い出したら怖くて震えるな」

「ワシ見れないんだけど……」

足元でフォンスは話しかけてくる。

「そうか、あんな化け物をお前は見たいのか。それなら見せてやる」

恐怖で固まるフォンスの顔を見たさに抱っこして見せてあげた。フォンスを降ろし、窓の下に隠れてもう少し様子をみるのか考えていた。

「アレはないね。何か、コッチみて笑顔で手を振つてたし」

「だろ？ あれは怖い。思い出して身震いもするわ」

普通に一人で会話を続けそうになつた。

「そういうえば、お前さつき手を振られたとか言つてなかつたか？ 何気ない一言に気づき俺はフォンスを凝視して聞いた。

「うん。目が合つて、二コ一コつて笑つて手を振つてたんだよ。本人は全く気付いてな

いんだろうけど、かなり不気味だつたよ」

フォンスはなんのためらいもなく、言い放つた。

「バレてもんじゃねーかよ。このバカ犬！」

少しだけ焦つた。

「え？ そうなの？ でも、広界が勝手に見せたんじゃん！」

暗に見たいとせがんだフォンスだが、自分から見たいとは一言も言つていのを盾に

互いに責任のなすりつけ合いになつっていく。

「お前が見てバレたんだから何とかしろよー」

フォンスと一人で敵の近くで、言い争つてゐるうちに怪物が扉を開け外に飛び出し、ノックノックシノッシとゆっくりと歩いてくる。

「始めて。わたくし食欲にまみれた人食いのピグモーと言いま

ます

気持ち悪い顔をしているが、礼儀は正しいようだ。

「牛の角にブタのような顔、背中は牛で前は豚か。豚と牛の混合種か？」

「よくわかりましたね」

「その見かけでわからない方がおかしい」

「何でわかったの？ ねえ何でわかったの？」

一回繰り返した時点でフォンスの口に手を当てて静かにしてないと、黙つてもらつた。

「それで人を太らせて食べようって話か」

「そうです。いつも我々は人に食べられる側ですから、夢の中ぐらい良いんじやないで

しょうか」

「そうだな。夢の中だけならいいかもな」

おや、とピグモーは意外そうな顔をしている。

珍しいですね、人が共感してくれるなんて

「そりや夢の中だけ済むのならな」

「」で一回間をおいた。

「ところが、お前がやつてることは現実にも影響してるんだわ」

俺はそこまで言つと目を閉じ右手を広げた。

手のひらが白く輝き、光が台風のように渦を巻いて飛び出している。

一瞬まぶしい閃光を放ち、利き腕には肩幅以上の剣が備わっていた。

目をゆっくり開きピグモーを見据えた。

「というわけで、悪いけどここで消えてもらひ」

「お前は何者だ」

ピグモーが得体の知れない化け物を見たように怯えた顔になつたのがわかる。

「口いつの知り合いで、たまたま夢に出てきただけではないな？」

今日はバツチリ決まりそうだな思いニヤリと笑う。

「そうだ。俺は想断士だ。人の想いがこもった夢が現実に現れないように消させてさせてもらづ」

こじで一息ついて、両手で剣をかまえた。

「お前の想い断ち切らせてもらう！」

勢いよく飛び出し、ピグモーの脇を一瞬で駆け抜ける。勝負は一秒もからなかつたはずである。

動きが鈍い相手はこの動きについてこられないからだ。だが、違和感があつた。当たつた感触はあつても切つた感覚がないのだ。

「いやー、君は早いね」

ピグモーはそこまでいふと手で切られた後をスリスリと撫でていた。

「でもね、それじゃ私は切れないと」

俺が振り返るとピグモーは平然とした顔で立っていた。

「私はメスだからオスより脂肪が厚いのよ。それで恥ずかしい話なんだけどね、厚すぎ

てお肉が固まっちゃったのよ」

オカマのような口調で笑いながら話しひぐモーはこっちを向く。

「残念だったわね。でも私をちょっとビックリさせただけでも褒めてあげないと」

ピグモーは相変わらず気持ち悪い顔で不敵な笑みを浮かべていた。片手には巨大なトゲ

トゲが付いた金属バットのようだが、先端部分になるに連れて段々と太くなっている棍棒を持つていた。

「剣で切つても効かないうえに鬼みたいな棍棒まで持つてやがんのかよ……」

側に来ていたフォンスに話しかけた。

「どうするの？」

「とりあえず、どれぐらいの力があるのか見極めないとな。見かけだおしつてこともあ

るし

そう話している間にも棍棒を持つてピグモーが襲いかかってきた。あまりの迫力に受け止めるのをやめ、俺は持ち前の反射神経の良さでとっさに躱した。

大地を揺らす大きな破裂音ともにさつきまで立っていた地面が無残に抉れている。

「おいおい、やべえな」

背中が冷やり涼しくなるの感じ顔が引きつっているのが自分自身でもわかる。

「避けちゃったけど、どうするの？」

「とりあえず、彼女を連れてフォンスは逃げるんだ。ここにいても邪魔になるだけだ。

俺はアイツの足を止める

「わかった」

俺たちは一手に別れた。

「こっちだ、豚骨豚野郎！」

「あんた、どっちも豚じゃない」

「う、う、うるせー。かかってこいオカマ女！」

「あなた挑発が苦手でしょ？」

面倒な事には関わりたくないから喧嘩をふっかけないことをピグモーに簡単に見抜かれ

てしました。

「まあいいわ。あのちょこまか動くちっちゃい犬は最後ね

ピグモーは逃げるフォンスと少女を一瞥してからこちらの方へ顔を向けた。

「先にこっちにいる坊やをやつちゃおうかしら」

ピグモーが話している間にも俺はせこく一太刀浴びせたが全く効

果がなかつた。

「何で聞かないだ。脂肪が厚いからか。じゃあどこなら効くんだ」自問自答する。

その間にもピグモーは俺を田がけてどんどん棍棒で叩きつけてくる。

立つていた地面がボツコボコになるといつ恐怖を味わいながらも必死に避けていく。

だが、ピグモーはどんどん迫ってくる。どうどうお菓子の家の壁を背にするまでに追い込まれてしまった。

「さあ坊ちゃんこいこまでよ。ムフ」

俺は必死にピグモーの目を凝視し冷静に考えた。

ピグモーが腕をあげ、もうすぐ振り下ろしてくる。

俺はそのときなぜか昔、農場に手伝いに行っていたときのことを思い出していた。忘れもしないあの夏のことだ。

その瞬間、自分の頭にある出来事が想い浮かんできた。

天高く雷が落ちてきたような錯覚とともにひらめきがおこった。

俺はその錯覚に導かれ行動した。

ピグモーが叩きつけきた棍棒を両手で剣の両端を持ち一瞬だけ受け止めた。

その瞬間、隕石が落下したような低い重低音が聞こえてきた。

そのまま一瞬の間に右手を下に引き左腕をあげ、体を右へねじり棍棒を右へ受け流す。

受け流した後に左手を剣から離し右手を横腹まで引いて、そのまま地面にめり込んでい

る太い鉄の鈍器の真横を通り、利き腕に飛び乗り素早く移動する。

顔の近くまで行き、体をややねじり力を溜めてから腕を一気に伸ばし、ピグモーの眉間

に剣を突き刺し、貫くほど深くめり込ませる。

「うがああああ」

ピグモーは目を見開き真っ赤にしながら野太い声で叫んだ。

やはり急所だったらしい。

「お前は牛と豚の混合種だろ？ それなら現実の世界で出荷するときに眉間に打たれる

ものを考えてみる。眉間に鉄のプレートで覆つておけばよかつたもの……」

ピグモーが倒れて消えるのを眺めていた。

「おーい、出てこーい。終わつたぞ」

フォンスを呼んだ。

「よく倒せたね」

さつきの女を連れてフォンスがこっちにやってきて喋つた。

「家畜の悲しい現実だよ。生きとし生けるものにもつと感謝しないとな」

「どういう意味？」

「生きているすべてのものに感謝しないといけないって意味だ。

家畜でも人が食べるた

め、実験動物であつても利用するために殺されるんだから、その命は無駄にしたらいけな

いつて思つたのさ。もちろん、お前みたいなペットであつても大切にしないとな。ただ、

それをほとんどの人は忘れているのさ」

俺は悲しい気持ちになる。なぜなら、眉間にたつた一撃で生きている事実が終わるんだ

と表しているからだ。

対照的にフォンスは自分みたいなペットであつても、大切にしてもらえるという後半の

部分以外は理解できていなかつたので、喜んでいた。  
しばらくし、じに来てからずっと黙つていた女性の声を初めて耳にした。

「ありがとうございました。私は、藤咲花桜梨といいます。花、桜、梨でかおりと言います」

「丁寧に頭をさげ、自己紹介と感謝の言葉を述べたが、ここが夢の世界であることに気づいてないらしい。

「俺は竜崎広界。広い世界の両端を取つて広界だ」

「僕はフォンス」

そういうと、フォンスは頭を撫でてもうつて嬉しそうにしていた。

「犬とお話ができるなんて、夢みたい」

藤咲は急にメルヘンなことを言い始めた。

「そりや、夢の世界だからな」

俺は当然のように答えた。

「普段は普通のダックスなんだけど、広界と一緒に寝ると夢の世界へ広界を連れてこれるんだ。それで話せるんだよ」

そこまで聞くと藤咲は「そういうえば」という顔をした。

「どこかでお会いしたような気がするのですが……」

首を傾げながら訪ねてきた。

「一回バイト先の相談屋にきましたからね。最近、食欲がわかな」とか言って

「あー、あの時……」

藤咲はまたお辞儀をしたが、まだそれだけで納得してないようであつた。

「たぶん、別の場所でもあつたことがあるような……」

藤咲は思い出せない記憶を必死に思いだそうとしている。

「ところでフォンス。アレを出せ。夢から覚める前に

「わかつたよ。はい。」

フォンスの首にかけられた布から爆竹みたいのを取り出した。

「何ですか？ それ

藤咲は当然の疑問をぶつけてきた。

「これは記憶を消す、爆竹みたいなもん」

「何で消すんですか？ 嫌です。ちゃんと会つてお礼したいです」

「それはできないんだ。俺たちは夢で会えた人とは、夢の記憶を持つたまま現実の世界

で会うことはできないんだ。たとえ、美人さんでも超VIPな人であつてもね」

俺はそう言つとウインクをした。

他人から見るとギザでかっこつけているだけにしかみえないが、俺の中ではかっこいい

キメのポーズのようなものだと思つていて。

俺は手に持つた爆竹に火をつけようとする。

火をつければ、パンッという音と共に記憶がなくなるハズである。だが、その前に体が薄くなつていいくのを感じだ。

「おいおい、マジかよ」

俺は焦るが、どんどん薄くなつていいくのは変わらなかつた。

3

竜崎は布団の上で目が覚めた。

「ヤベー。記憶を消す前に目が覚めたか……」

騒いでもしようがないので、彼は布団から出る。

掛け布団の上にはフォンスが大股広げて、股間を見せびらかすよう仰向けて寝つているのが竜崎の目に入った。

「起きろ、バカ犬。散歩行くぞ」

フォンスはパツと目を覚まし、着替えた竜崎に散歩へ連れて行かれた。今日は良く歩く

日だつたらしく、一日を占う意味でも快調な滑り出しである。

散歩を終えた竜崎は朝食を食べ、いつも通りに高校に登校した。

「相変わらず、眠そうだな」

教室につき、登校途中で会ったカトケンと話していた。

「昨日は話を聞いていて、特に疲れたから」

竜崎は加藤に相談屋以外の話は何も伝えていない。

「それよりも、たんなる寝疲れだろ」

「まあな。そういうことにしどくよ」

竜崎達は教室で中身のない会話を続けた。

そこへ2年の教室のドアの前に立っているスカートを履いた女子が誰かを呼んでいるよ

うな気がした。

「あーゆう美人つて俺たちとは住んでる世界が違うよな」

加藤はそういった。

足も細く徐々に上へ見て行くと、スベスベしていそうな白い肌に綺麗なソックス。スカートもシワになっていない。そのまま何もない胸元を通り過ぎ、首元を眺めるとそのまま

顔の位置まで視線が動いた。

顔を見ると竜崎は飲んでいた紙パックをむせて噴き出しそうになれる。

「おーい。広界くーんこの子が呼んでるよー」

クラスの女子が竜崎へ呼びかけている。

彼女は満面の笑みで手を振っていた。

竜崎は掃除用具いれの中に慌てて隠れようとしたが、無駄だった。

「見られてから隠れるアホがコウちゃん以外にどこにいんだよ

「やつぱり？」

竜崎は諦めて彼女のもとへ歩いて行つた。

自分の妹のもとへ。

「家でなるべく教室に来ないでメールをしてくれって言ったよな

「うん。でもお兄ちゃんにどうしても言いたいことがあって

妹の奈緒は心配するよつた顔で言つてきた。

「なんだい？」

竜崎は心配してくれる妹に用件を言つよつに促した。

「最近、下駄箱にイタズラされるよつたヒドイことした？」

竜崎はキヨトンし、目が点になつた。

「お兄ちゃん、黙つてないで答えてよー！」

彼には自分の妹がなぜ怒つているのか理解ができなかつた。

竜崎は首を傾げるほど、そのようなことをした記憶がなかつた。

「いや、知らないな。カトケンならやりそつだけさ」

竜崎はチラつと座つている加藤を見ると話が聞こえたのか、右の

口角を少しあげ中指を

たててこちらを眺めている。

「それで、どんなやつだつたんだ？」

奈緒へ視線を戻し、話を続けた。

「すつごく綺麗な人」

なぜかこの一個下の女子は綺麗な人を強調していた。

「だからお兄ちゃんが、きっと何かヒドイこととかをした思つたのよ」

「何でイタズラだと思つてんだ。ラブレターかもしれないだろ！」

？」

竜崎は希望を捨てないように必死に訴えた。

「そんなわけないじゃん。バカ」

妹に最後の望みまで一言で絶たれ、うなだれる竜崎。

「とりあえず、下駄箱に行つてみなよ。いいね！」

「わかつた昼休みに行つてくる」

妹と別れ、教室に戻つていく竜崎。

「おい、俺の妹じやねーか」

加藤に八つ当たりする竜崎。

「誰も妹じやないとは言つてないぜ」

美人という言葉を聞いて想像して、少し現実が見えなくなつてい

たのだ。

それに加藤の言つこと<sup>もつと</sup>が尤もだつたので言い返せない。

「それに何で僕が女に嫌がらせをすると思ったんだい？」

加藤は聞いてきていたが、そのままそんな印象だからとはいえず、竜崎はごまかす言葉

も見つからぬため、聞き流すことにした。

担任が教師に入り、出席を取り終えると、彼はそのまま寝てしまつた。

待ちに待つた昼休みになり、お昼ご飯を食べずに彼は下駄箱へ直行した。

そしてそのまま自分の下駄箱へ行き、扉を開いた。

そこには、なんの変哲のない手紙が一通置いてあつた。

「おい、まさか富鉱の手紙じやないだらうな

一緒について来た加藤が聞いた。

「これが金のなる木とか金の出る鉱山のよつに見えるか？ きつとまさしく不幸の手紙

だよ

竜崎はそういうと手紙をあけた。

見た瞬間、彼は果てしなく後悔した。

本当に不幸の手紙であった。フラグを立てて回避しようとした彼の作戦は崩れ去つた。

「それでどんな手紙だつたんだ？」

後ろで見ていた加藤が人の不幸を期待するような笑みを浮かべて聞いてきた。

「ふ、ふ、不幸の手紙……」

竜崎は真つ暗な気持ちで5文字の言葉を口にした。

そのまま涙目を浮かべ、加藤の方を向いた。

「お、おう、そうか。俺には関係ないからみせるなよ。絶対だからな

加藤が顔を引きつらせて後ずさりして離れていく。

## 夏休みと勇気だけが友達さ

### 第二章～夏休みと勇気だけが友達さ～

1

その不幸の手紙を受け取つた竜崎は数年前のことを思いだしていった。当時、中学生の竜崎は一人の不思議なおじさんと出会いことになつた。

親の知り合いの牧場で一週間牧場体験をする予定で夏の北海道の山奥に来ていた。その

生活の途中で彼は息抜きとして、たまたま札幌という北の大地でも栄えた場所にきていた。

だが、その帰り道では息を抜くどころか彼の心は真夏なのに雪雲で覆われ真っ暗のままであつた。

数時間前、彼は牧場の人とは離れ、一人で地下鉄駅のホームに立つていた。ローカル番組から大ヒットした番組のショップに寄つた後、最後尾の車両に乗るためにプラットホームの端で電車の到着を待つていた。先が暗く見えないトンネルから列車の先端が目にうつり、彼は床に何気なく置いてあつたカバンを手にした。

その時の彼は横にいた暗い顔をした同じ年ぐらいの女性に声をかけようか迷つていた。

彼女に気があるわけではないが、なぜか竜崎はなるべく早めに声をかけなくてはならない

気になっていた。

結局、心に何かが残るも話しかける勇気がないのでやめてしまい、  
彼がどうしようか悩

んでいるうちにも列車が早い速度でホームに入ってきた。  
竜崎が隣にいる女人をチラリと横目で見てみると高速で走つて  
くる鉄の塊に無防備な  
恰好で飛び込んでいつてしまつ。

「危ない！」

彼が叫んだ時にはもう手遅れであり、反射的に目を瞑り目の前を  
真っ暗にしても何が起  
きているのかは明白であった。周りで目撃した人は少ないが、見た  
者に衝撃とトラウマを  
与えるには充分すぎる内容であった。竜崎は自分が声をかけておけ  
ばふせげたかもしれない  
いと、ふと感じてしまった。

だが、あの場で直感を信じて声をかけられる人は皆無である。

「広界君？ 大丈夫？」

牧場に戻り、父親の知り合いで<sup>かいでい</sup>貿出居牧場の牧場長が心配して声  
をかけてくれたが、竜  
崎は頷くだけで何も答えられなかつた。

「目の前での惨事をみたら誰でもショックを受けるわよ」

牧場長の奥さんがそういうと彼を心配そうな顔で見つめている。  
彼が何も話す気にならないのは当然であった。実家にも連絡が行  
き、明日の昼過ぎに竜  
崎の母親が迎えに来る。

まだ小さく引き取りてのいなく、竜崎家に引き取られることにな  
つたミニチュアダックス

も心配そうに見てきたが、言葉を発せないので今の竜崎には何を言  
いたいのかわからなか

つた。

結局、そのまま夕食も喉のどを通らズ、人工的な光と月の明かりが支配する時間がなり、就寝の時間になるも、彼は寝つけそうにないまま布団に入る。電気も消しあたりが暗闇に包まれると、今まで感じたことのない圧迫感を感じた。そして、頭の中で血の惨劇が蘇る。竜崎は深く布団をかぶることにして、無理やり目を閉じた。

彼は少しすると、フワフワと浮いて気持ちのいい感覚になつてきた。彼は夢を見始めたのだ。今日の出来事を忘れ、夢の中で足元で寝ているはずのダックスと遊んでいたが、犬が急に尻尾を巻き怯えだした。

怯えだした先を見ると列車の下敷きになつてしまつた女性の姿があつた。

彼は言葉で言い表せない悲鳴をあげたが、誰にも届くはずはない。「なぜ声をかけてくれなかつたの？ なぜ誰も私を止めてくれなかつたの？」

普通の人が聞かれたら、自分は関係ないのに巻き込まれたんだと言えるが、竜崎には心を見透かされているような気がして何もいえなかつた。

竜崎の心の迷いを見透かすように彼女は迫ってきた。

「声をかけようとしたんだ、心配だつたから。でも……」

彼は事故直後に感じていた心では思つていたことを素直に口から出した。

「でも実際には飛び出してからしか声をかけてくれなかつたじゃない。絶対に許さない。

絶対に……。地獄の底まで呪つてやる……」

彼女はそこまで言うと薄気味が悪い笑い顔になつっていく。

自分に相手の心へ一步だけでも踏み込む勇気が持てなかつたため

に、彼女がこうなつて

しまつたことを改めて広界は後悔した。

「どうすれば許してもらえるの？」

竜崎は死んでしまつた彼女へ聞いた。

「一生話し相手になつてもうつわ。あなたが死ぬまでね……」

うなだれていた竜崎へ彼女は見つめていた。

それを聞いて背筋が寒くなり、まるで白装飾を着てている彼女に暗闇が広がる底なしの深い

い井戸の中へ引きずりこまれそつた氣分になつた。

そこで彼は体が薄くなつていくのを感じた。

それはまるで温かく解放された気持ちになつていつた。

竜崎は朝をむかえシーツが汗臭く湿つてゐるのがわかつた。

「広界くん。今日、警察に行くんだよ。支度して」

牧場長の奥さんが目覚めを待つていていたのかのように声をかけた。

「わかりました。食欲がないのでそのまま行きます」

竜崎はサッサと支度をすませ、警察へ話の続きをしに行つた。彼は未成年であることと、

親が東京にいることからその日の聴取は軽くしか行われていなかつたのだ。

警察でどんな状況だつたのかなどを話し、その日の午前中には何もかも終わつた。彼は牧場長がうまいものを買ってきてやるから待つていろと言つたので公園のベンチに座つて待つ。

ボンヤリと昨日の光景と夢を思い出すと恐ろしくなつていく。それに起床してからずつ

と後ろから見られている感じもしていた。彼がそんなことを思いながら座つていると、隣

に座りこんだ変なおじさんが声をかけてきた。容姿からすると明らか

かに北海道の人ではないのがわかる。

「どうしたんだい。何か浮かない顔してるけど?」

「おじさんには関係ないです」

記者とかに何を聞かれても答えるなと警察から言っていたので答える気は全くなかつ

たが、竜崎にかまうことなくそのおじさんは自己紹介を始めた。

「俺は東京で占い師のようなことをやつている、柳林。やなぎやし君は?」いかにもうさんくさい職業であるけど、自己紹介をされたのなら自分もしないと失礼に

あたると思い、仕方なく竜崎も応じた。

「竜崎広界。見た目でわかると思つけど、学生」

竜崎はそう名乗つた。

「君は学生じゃないだろ?」

少年は何を言われたのか全くわからなかつたので固まつてしまつた。

「君は大学生じゃないだろ? それなら君は学生ではない。生徒だ」

前に友人と話していたことを思いだした。

「あ、そうでしたね。大雑把な見かけによらず、細かいこと言つてきますね」

竜崎は思わず会話に乗つかつてしまつた。

一度会話になると、口止めされていた昨日の事件のことと夢の中のできごとと、誰もい

ないのに後ろから付けられているような気がする」とも話してしまつた。それでも柳林は

変な目で見なかつたために竜崎は気持ち良く話せた。

柳林はなぜか夢の話を正面目に聞いていた。

「君はそれ以来なぜか後ろから見られてる感覚があるんだね?」

「はい。ちょっと薄意味わるくて……」

「んー、考え過ぎだよ。今日は家に帰つてゆっくり休みなさい」柳林はそういうと、イスから立ち上がりどこかへ歩いていった。柳林と話すと竜崎はなぜか心がスッキリした。

そこへタイミングよく、牧場長の貝出居が戻ってきた。

「良い店を見つけたから行こう。食べなきや体に良くない」

「おいしい食べ物を買っててくれるんじゃなかつたんですか？」

「ここで食べるより、できたてのものを食べた方がウマイからさ」早くそこには気づいてほしかつたなと思うが、貝出居のささやかな心遣いに竜崎は感謝した。

「良い店って何のお店ですか？」

「味噌ラーメン。好きだらう？」

「はい。大好きです！」

笑顔で返事をし、そのまま一人でラーメンを食べに行つた。

二人は食べ終え、空港へ車で行くと母親が待つていたので合流しそのまま東京へ帰つた。

貝出居が空港で竜崎へ大変な目に会わせたと母親に頭を下げていた。竜崎は帰宅途中あの事故のことは父親にもまだ小さかつた妹にも何も聞かれず、そのまま就寝前の時間になつた。

「いらっしゃーい」

彼女は二タ二タと不気味な笑みを浮かべていた。

俺は視線を合わさないように決めると挨拶する前に提案をした。

「とりあえず、呼び名を決めたいんだけど」

「そうね。私は」

「きみ、貞世ね」

相手が呼び名を名乗る前に決めてしまつことは、会話作りには意外と有効であるのだ。

「彼女は手を震わせて怒りはじめた

「じゃあアナタは皮越芋太郎ね。地獄の底まで付きあつてもうつから」

「その名前は色々とダメな気がする。ミサキにしてくれ」  
貞世は視線を合わせようとしない俺をじっと見つめている気がした。

その場の雰囲気に耐えきれず俺は言葉をかける。

「それで今日はどんな話をするんだい?」

「そういえば、今日は犬が一緒にじゃないのね」

「あれはウチの犬じゃないから」

何であの犬と一緒にいると思ったのだろうかと思ったが、その前に聞くべきことを聞くことにした。

「なぜか、貞世と夢の中で一緒に話してから一日中、ずっと後ろから何かに見られてる

気がするんだけど……。何か知らないかな?」

一日過ごして感じたことを素直に聞いた。

「えー。見てたわよ。ずっとね……」

俺は彼女に見つめられて背中に氷を入れられたように背筋が冷たくなると同時に顔が

段々と青くなつていくのがわかる。血の気が引く感じとはこういうことをいうのかと初めて知った日でもあった。

しばらくの間、沈黙の時間が流れた。  
彼女のジーと見つめてくるが、俺はいまだに視線をそらす。そのまま合わせると死線を

越えてしまうような気がしていた。  
そのまま朝を迎えたからどうなるのだろうか、と感じていたが、後

ろで足音がしたので俺  
は振り向いた。

「やあ少年」

なぜかそこには昼間に出会った柳林が手を振りながら立っていた。  
「これが昼間に話したつていう人？」  
「うん、そうだよ。生靈みたいのに付け回されているみたいなん  
だ」

柳林は胸ポケットに入っているハムスターとしゃべっていた。

「ところで竜崎君。昼間に話していた夢に出てきたつていう小さ  
い犬は？」

「えつと、あの犬はウチの犬じゃないので。もううつ約束はしたん  
ですけど……」

「そうかそれなら良かつた。大事にしろよ」

「ところでどうしてハムスターが話しているんですか？」

当然の疑問を聞いた。

「ん？ それは夢だからだよ」

「そなんですか。それだけの説明で納得させられるとおじさん  
を変な人扱いしないと  
いけなくなりますよ」

「君と一緒にいた犬も話せたんじゃないの？」

「いや、話してませんけど」

俺は犬が話せるわけがないと思つていたから聞いた質問に首を傾  
げた。

「まだ小さいからかな。ま、その犬が君と暮らすならそれでいい  
や」

当時の俺では言つてゐる意味がわからなかつた。

「とりあえず、あの白装束で井戸の中から出そうなのは君の心が  
作った怪物だから、君  
自身でどうにかしないとダメだから  
「そなんですか？」

「うん、そうやう。君とは話したいだけみたいだし、こいつして存在を無視して会話をしても何もしてこないしね」

ただ、と柳林は付け足した。

「僕には襲つてくるだろうね」

それを聞いて柳林の顔へあらためて向きなおした。あいかわらず何も話さず、ずっと見つめてくる彼女。

俺は何をすればいいのか彼に聞くことにした。

「それであの悪霊みたいのを追い払うには何をやればいいんですか？」

「私は悪良ですかそうですか」

ウフフと彼女は薄ら笑いを浮かべ、自己の中で存在を良いのか悪いのか価値をあいまい

にしてどこかへ歩いて行つてしまつた。

柳林は貞世が消えたのを確認してから言つてくる。

「君、早めに倒さないと明日からずっと悪夢に出てくるよ」

自分が原因とはいえ、それは勘弁してほしかつた。

「どういう意味ですか？」

「彼女は成仏みたいのができずに困つてているんだ」

柳林はとても曖昧な表現で話し始めた。

「みたいのつて何ですか？」

「君が自分に勇気がなかつたと後悔したせいで、夢の中に入格がめちゃくちゃなまま金

に出現せられてしまつたんだ。それで彼女の存在を消すために君が成仏させないといけないんだ

俺は彼女が安らかに眠れない原因が自分であつたことがショックだつた。

それから少しの間、俺の耳には柳林の話が入つてなかつた。

「聞いてるのかい？」

「すみません。聞いてませんでした。彼女に悪いことをしたなと思つて……」

「それだけわかつてれば今は充分だ。消すための方法を簡単に説明しておくと、君がイメージしたことがここでは実現できるからそれで彼女を倒す。実際に手にしたものや体験

したものの方がイメージしやすいだろ?」

「はいそうですね。触った感じ、体験して肌で感じたことの方が、頭の中だけで考えた

ものより、実感がわきます」

「じゃあためしに少しやつてみよう」

柳林の簡単なレクチャーが始まった。

俺は本やアニメ、映画でしか見たことがない魔法使いになつたみたいで少しどキドキしていった。

「まず、好きな女の子とのキスした時のことを想像じてみよう」

「はい」

俺は真剣に想像したが、中学生である自分には思い浮かぶわけもなく、ギブアップをした。

た。

「あ、君まだ生徒だつたね。しかも中学」

柳林は少しニヤついていたが、俺は真剣になつていたので、なぜニヤついているのか想像がつかなかつた。後日、改めて思い返した際に俺は柳林の玉を思いつきり蹴つ飛ばして

おけば良かつたと思った。

「とりあえず、これで何も知らないことを想像することが難しいのはわかつたね。次に体験したと思えることは……」

柳林は次に何かを考えていた。

「最近、自転車で家の近くのとても長い坂を一気に下ったことがあります。その体験ではダメでしょうか？」

「じゃあ、それでいいからやつてみよつか？」

「あえておじさんへ返事をせず、田を喰りイメージを始め、坂を一気に下つていた時のことを思いだす。」

坂は急になつており、脇道もないのでいつも人が飛び出してくる心配もなくドンドンスピードを上げていける。ガードレールのすぐ横をやさしく追い風を引き連れさらりと速度を上げていく。そのうちこ突風も背中から押してくれるような感覚になつた。

段々、自分の背中へ実際に風が流れている感覚になつていくのがわかる。

髪が風に流され、たまたま着ていたパジャマも音をたてていた。

「よし、OKだ」

柳林の声を聞きそこで田をあけた。

自分自身の姿を見てみると、髪がボサボサになつて、少し腕や足などの体が冷えている

ことに気が付いた。

「これが自分の想像の力、……」

「そうだ。今度はそれを簡単なイメージに変えてやつてみるんだ。後ろから風に押され

て一気に牛が突進するよつに想像して走りぬけるんだ。つまり、想像することと走ること

「一つを同時にやつてみるんだぞ」

「やつてみます」

さつきと同じ想像し少し走つてみたが、普通にランニングしていくのと同じだった。

「一緒にやるのは難しいですね」

「最初は誰でもそうだ。コツをつかむまでやつてみる」

俺は集中した。これでも集中力はある方だと思っている。

「やつきの感覚を思い出せ。後ろから風に背中を押され、体全体で感じた風を」

俺はブツブツつぶやくと、まず一步を踏み出した。次にもう一步。次の次に踏み出した

足がベルトコンベアのように前へ戻ってきた。次々とそれを繰り返していくた。

風を受けて走ってる感覚になり、ふと目を開けるとそこには誰もいなかつた。

「柳林さん」

声をかけても誰も見当たらない。

そして元の場所に戻ろうとし、今度は目を開けて風の感覚を思い出し走り出す。

すると、やつと柳林の姿が見えたと思うと、すぐに真横にまできていた。

「それだよそれ。想像して感覚として掴むことが大事だったんだ」

柳林は俺を褒めたが、俺は別のところに関心があった。

「想像で何かが変わることとは服も変えられるんだよね？」

「うだけど、どうしたんだ？」

俺は憧れの着たい服をイメージした。

「やるなあ少年よ」

「前からゲームの戦士のキャラの衣装に憧れたんです」

俺は少し照れながら頭をかいた。

「君は呑み込みが想像以上にはや……」

柳林はそこまで言つと、苦痛な顔を浮かべて腹から飛び出している包丁で血を流してい

るのが目に入る。

俺はとつたことで事態が呑み込めなかつた。

「何で余計なことをするのよ……」

柳林が倒れると後ろから不気味な声がした。

「アナタ ハ ワタシ カラ ハナレラレナレ ノ ョ ウフフ

フ

貞世は返り血を浴びた白装飾を見に纏い、満面の笑みを浮かべていた。

「ジャマモノ ハ イナクナッタ」

「おい、なんでだよ！ 何でこのおじさんか死ななきゃならないんだよ」

俺は体が恐怖で震えながらも必死で問い合わせた。

「邪魔する方が悪いのよ。アナタは私とずっと一緒にいるのよ」不気味な雰囲気の声から元には戻つたが、恐怖は終わらなかつた。

「ねえ、約束したでしょ。あなたが死ぬまで一緒にいるつて。私はアナタがいるから」

こにいるの。アナタが消えれば私も消える。だけど、私だけ消えることもできるのよ」

彼女は自分の首に包丁を向けていた。

「やめろ！」

一度目はもう見たくなかった。

「ものわかりがいいじゃない。やめてあげるからずっとお話ししましょう」

俺は柳林の方を見つめた。

「君が貞子を解放するんだ」

意識が混沌としているのか柳林は彼女の名前を間違えている。

「君が作りだしたんだ。君が勇気と責任をもつて倒さないとダメだ……」

俺は悩んだが、彼女を生んでしまったことを素直に謝り、永遠に

安らかに眠りについて

も「うりうり」とした。

「「「めん、声をかける勇気がなくて」

竜崎はとても誠実に田を見つめて伝えた。

「君を作ったのは僕だ。君の墓参りにもちゃんと行く。君がもうこれ以上淋しい思いを

しないように墓に話しかける。だから……」

そこまでいようと彼女の目に涙が浮かんでいるのがはっきりと見え、俺はさらに自責の念

が強くなるが今度は自分自身で決着をつけなければならぬ。

「だから、君を倒す。顔は傷つくと嫌だらうから、お腹のみぞおちに苦しまないよう」

一発で決めさせてもうつ

俺はそこまで言つと、さつきの要領で勢いよく突進し、アッパーをいた。

彼女の体が九の字に曲がり、何かつぶやいていた。

「あ、り、が、と、う。」

彼女を自殺に追い込んだのが何なのかわからないが、とても悲しい思いになつた。

「あ、終わつた？」

そこには何事もないように柳林が立つていて。

「はい、終わりました」

俺はあまりにも理解に苦しむことに遭遇し、普通の返事をしてしまつた。

それから30秒ぐらいたつただろうか。

「何で生きてんの！ あんた刺されたる！？」

やつと聞くべき質問にたどり着いた。

「うん。でもこれは夢の中のお話だよ？」

「夢の世界でも限度があるのでしょ」

俺は呆れて言葉を返した。

「ほら、現実の世界で前に刺されて死にかけたし、だからよつまどのことがないと夢の

世界じゃ死ねないと夢の

「世界じや死ねないと夢の

柳林はそんなことを笑いながら話していた。

「なつとくできるか、ボケ」

俺はまともなアクションをしたつもりでいたが、柳林には受け入れてもらえなかつた。

そして柳林は地面に落ちていた石を拾い上げ、思案している顔していた。

その石を見てなぜ考え込むのかわからなかつたから聞くことにした。

「なんですか、その石みたいなやつ?」

柳林は俺のその質問には何も答へず、どこかへさつと帰つた。

する。

「お、そろそろ朝になるな。僕はこれで消えるから、僕の店に一度おいでよ。良い物あげるから」

そこまで言つと、柳林は少し黙り段々と透けていく不思議な現象になつていつた。

「とりあえず、店の名前はまだいいや。君の家に直に<sup>ただ</sup>送るからよろしく」

「直つて家の住所とか言つてないんですけど……」

柳林に歩みかけたが、もう見える状態ではないほどに薄くなつていいく。

「あと、このことは話したらダメだぞ。変な人にしか思われないからね」

柳林は最後に右手の指をパチンと鳴らし、口外をしないよつて止めをしていつた。

俺にはとうとう見えにみえないほどに消えてしまつ。こんな夢を今までみたことなか

つたから奇妙な夢だという程度にしか考えられなかつた。

竜崎は田を覚ますと、なぜかすつきりした気分になつた。もう誰にも見られて、いる感覚はない。

ただの夢の中だけど、RPGに出て来るよつた勇者の服もきれり、自分自身に踏ん切りもついたりと大満足であった。

ただ、他人に話すなどいう言葉が気にはなつたが、別に誰かに話すつもりもない。たまにつける日記に書くぐらいである。さつそく忘れないうちに夢の出来事を田記に書き始めた。

た。

「「」はんよー」

ちょうど書き終えた頃に下から母が呼ぶ声がした。下に降りて行くと母親が心配そうな顔をしていた。

「何、心配そうな顔してんの？」

「いや、昨日はうなされたって聞いたから、心配してたのよ」

「あ、もう大丈夫。ケリをつけてきたから」

彼はそういうと笑顔を作った。

竜崎の母はケリの意味を聞きたがつてていたが彼は話すつもりがなかつた。

数日経つと竜崎宛てに郵便物が届いていた。

差出人に柳林盛夫と記してあり、手紙と一緒になぜかまだ家に来ていらない犬の首輪も付いてきた。

そして手紙の内容にはこう書いてあった。

『夢のことは誰にも話してないね。たぶん、あれ以来あの感じの夢も見ていないと思う

けどね。とりあえず、そこにある夢封じの首輪は犬に使ってくれ。

その首輪をしてないで

一緒に眠ると、また変な夢を見ると思つから。

あと、ペットを粗末に扱つちゃダメだぞ。愛情を持つて育てるんだ。

そうすれば、きっと大きく成長しても、かわいく思えるから。

そして、色々な体験や経験をしなさい。すればするだけ、君の力になる。

P・S・この前一緒に見た夢の話が風の噂や都市伝説のたぐいで万が一にも僕の耳に入つたら、君の好きな人と恥ずかしい秘密を近所や通つている中学校、それこれから進学

するであろう高校も含めた君に関係するすべての人バラします。いつもして手紙を送つてているのだから、君のことや住所を知つているのはわかるよね。僕

からは絶対に逃げられませんよ。』

手紙を見ると竜崎は体が震え出し、夢の中で感じたようにまた顔が真つ青になつていく。

まるで夢の中で出会つた眞世より怖いものをみたような気分になつた。世の中にばつ

と知らない方がいいこともあるのだと実感したが、もう手遅れであった。彼はもう、勇気

と身の危険を感じざるを得ないとへの一歩を踏み出してしまつたのだ。

丹口はめぐり、夢のことを忘れていた竜崎は高校に入学していた。

高校に入学してからのある日、彼の通う高校は私立の高校にして

は珍しくバイトが認め

られているので、ボンヤリと求人の広告を見ていた。

その彼の側にはつぶらな瞳の犬がいた。奥出居牧場で引取り手が見つからず、生まれた時は小さい子犬であつたであろう犬は、竜崎家でフォンスと名付けられた。ミニチュアにしてはとても大きく成長したミドルダックスと呼ぶ方が適切なサイズのフォンスと名付けられた犬と一緒に暮らしていた。そして首には柳林からもらった首輪を付け続けていた。

「未経験者の高校生可。店長が面接をするので、その場で採用もあり！ 誰でもすぐに高自給！ 明日から君も聞き上手！ そしてサボり放題！」と書かれているとても変なキヤツチコピーで募集をしていた、とてもうさんくさいバイト先を見つけた。

竜崎は嘘くさくともお金になるならいいやと思い早速、締め切りにならないように電話をし、次の日には面接に行くことになった。うさんくさい謳い文句と同様にうさんくさい雰囲気を出している店に入る。

そして一室の扉を開けると、そこには面接官として柳林が満面の笑顔で座っていたのを目撃してした竜崎はあまりのできに驚愕きょうがくしてしまつ。

「待ってたよ。今回というか最近は君の家のポストだけにしか入れてないから、君しか来ないんだけどね」

笑いながら柳林は話しかけてきた。

対する竜崎は数年前にもらつたあの手紙を思い出し、ゾッとした。

「君はここで働いてもらうから。あの犬のこともそろそろ話さな

いといけないしね」

柳林はなぜかもう採用が決まつてゐるかのように話し始めた。そして、また家で飼つて

いるあの犬の話もしていた。

「アルバイトは、いくつかの簡単なマニュアルがあるから、慣れるまでそれにしたがつ

てくれればいいから。一通り学んだあとはそれからどう対応するか、君の自由だ。頼むよ、

新人君」

そこまで言うと面接官のおじさんは一呼吸置いた。

「それで質問とかある？」

柳林はそういうと、竜崎に何かあるのか尋ねた。

「ふたつあります」

「どうぞ。答えられる範囲のことなら答えるよ」

「まず、一つ目。家に首輪を送つてきたり、なぜあの犬にこだわるんですか？」

竜崎は数年前も犬の話をされたのでひつかかっていたことを聞いた。

「あー、それはね」

柳林は真剣な顔つきになつた。

「あの犬が夢に行くためのチケットみたいなもんだからだよ」

「はあ」

と答えはしたが、一般人の竜崎には当然理解できるはずがなかつた。

「まあ簡単に言うと、あの犬は夢の力、ギギを持つてゐるからね」

「チケットも鍵も扉があつたら中に入るのに必要にある同じようなものじゃないですか。

人に渡して入るのか自分で使うかの違いで」

「よく気づいたね。そんなもんだと思つてくれればいいよ。扉の向こうに行くのに必要

な物だつてね」

「ところで、なんで俺の話を聞いただけでフォンスが持つていてる  
とわかつたんですか?」

「一応確認しに、わざわざ牧場まで行つたんだよ。なぜか引き取  
り手がいなかつたのも

そのせいだよ。適切な飼い主に巡り合つまで、鍵を持つた動物は人  
から避けられるんだ。

僕が夢の中ではなしていいた、ハムスターの松星<sup>まつぼし</sup>のマツ君を覚えてい  
るだろ?」

「あのハムスター松星つて言つんですか?」

「うん。松の右に星<sup>スター</sup>で松星」

竜崎はまさかの直球の命名にこんな店長の元で働くのが不安にな  
つていつた。

「マツ君もずっと売れ残つていたんだ。それを私が引き取つた」

竜崎はそこまで聞くと、ちょっと不思議に思つたことがあつた。

「何で牧場の名前と場所を知つていていたんですか?」

「だつて、君が言つてたじやない。東京から来て、貝出居牧場に  
来てるつて。名前さえ

わかれば後は簡単だよ」

「じゃあ何でウチの住所もわかつたんですか?」

「ん? それは調べた。僕にわかれば簡単だよ」

柳林は笑いながら答えていたが、竜崎は少し怖くなつていつた。

「もう一つ質問いいですか?」

「なんだい?」

次に竜崎は恐る恐るを口にだした。

「バイト採用の辞退権はありますか?」

「ある」

柳林は即答した。

これで竜崎は断ることができるとホッと胸をなでおろした。

「と思つてるの? 断つてもいいけど、どうなつても知らないぞ」

柳林はなぜか笑顔で答えてきた。

「それにバツクれて逃げたり、サボつたらわかるよな？」  
そういうと、ドス黒いオーラを見に纏い眼光の奥をひからせていた。

「で、ですよね。頑張つて働きます」

竜崎は顔面を引き攣つらせながら答えた。

「よろしく」

店長は頷いた。

「ただ、君は高校生だから、テストの時はちゃんと配慮もあるし、いい点数を取るコツも教える。悪くないだろ？」

いつして、竜崎はこの店で働くことになった。

不幸の手紙を受け取った竜崎は凹みながら、人の待ち合わせ場所へ向かった。そこはどこにでもあるファミレスである。『JJK』普通の男子高校生の竜崎なら一度は行くであろう

その場所は日常と特に変わった所はない。

ただし、竜崎を待つている相手がいつもと変わっている。そこに待っていたのは女性で

年下の同じ高校に通う女子である。

「やあ待った？」

「いいえ。私も今来たばかりなんです」

と、言いつつドリンクバーに頼みケーキを食べていた。そんな彼女を見ながら席に着く。

「とりあえず」

と竜崎はまず先手を打った。

「用件を聞く前に頼みごとがある」

竜崎はすぐに切り出すと、彼女は少しビックリして戸惑っていた。

「夢のことはバラさないでくれ」

竜崎は椅子の上で背筋を伸ばし正座をして深く頭を下げた。すると、勢いのあまり店内

に響き渡るぐらいいの音を立てて机に土下座をしてしまった。

「大丈夫ですか？ 机にぶつけてドカーンって音がしましたけど

「この机は地雷原ですか？」

彼女はちょっと疲れているのかもしれない。擬音がおかしい。

竜崎はそう思い、さつさと話を終わらせようと思つた。

「とりあえず、夢の話は誰にも言わないでくれ。頼む」

「どうですか？」

「色々と困るんだよ」

と竜崎はあいまいに答えると、相手は興味深そうな顔をした。

「色々って何ですか？」

「色々は色々だよ。ちょっと答えられないんだ」

そういうと彼女は考え込むよつた顔になつた。

「えへ、どうしようかな」

向かい合つている相手はアゴに人差し指を当て斜め右を見ている。竜崎はそのじぐさを見て、くつそかわいいと、思つがこのまま引きずりでは困る。

「頼む。バラされたら困る」とがバラされるんだよ。あの店の店長に！」

「竜崎さんがバラされたら困る」とってなんですか？」

もう一步踏み込んできた。

「それは言えない」

竜崎は苦し紛れにそう言つしかなかつた。

すると彼女はニコつと微笑んだ。

「冗談ですよ。私はこれから言つつもりはありませんよ」

彼女はアハハと笑い始め、彼は啞然として彼女を見つめるしかなかつた。

「ただし、条件があります」

そして指を一本立て、竜崎へ提案してきた。

「お姉ちゃんのことを助けてあげてください」

「手紙にも書いてあつたけど、お姉ちゃんってどんな人？」

「優しい人ですよ。ただ、最近、悩んでるみたいで……」

「ふーん。それでその本人は？」

「あ、いました」

彼女が指さした先には一人の美人が立っていた。

「お疲れさまでした~」

「ちょっと待ちなさいよ、

顔をみた途端に席を立ち帰ろうとした竜崎の腕をグッと掴む、肩まであるストレートへ

アーの女性がいた。

「何でお前がここにいるんだよ、

竜崎は普段からあまり関わらないようにしていたサラサラヘアの相手へそう聞いた。

「私だつて、知らないわよ。妹が何とかしてくれる人がいるって言うからここに来ただ

けであつて、相手がアンタだつて知つてたらここに着てないわよ、

藤咲 誇紫はそういうと席に着きドリンクバーを頼んだ。

店員さんが伝票を持つてくるまで、気まずい沈黙の時間が続いた。

竜崎は彼女のことを嫌いではないが、関わりづらい存在であった。

「藤咲つて名前から気づいとけばよかつたな

竜崎は頭をかいて嘆く。藤咲姓がそれほど多くはないことから、

彼女の縁者であること

は推測できたはずである。

俺と誇紫は中学校が同じで高校1年でも同じクラスだつた。始業式の日に男女交互の出

席名簿順に座るとたまたま隣同士だつた。それだけでそれ以上のことは何もない。

基本的に仲が良くなつた人以外には無愛想だつた俺とは違い、誰にでも愛想がよく誰とも仲良くなれる藤咲。

そして皆に好かれようと愛嬌をふりまいていた誇紫を俺は哀れ思うのと同時に少し羨ましくもあつた。バイトを始めるまで自分にはそれができなかつたか

ら。人によつて合う顔

に変え、まるでカメレオンのように周りに適応しながら上手く世渡りをしていく。

藤咲は中学でも初めのうちは、俺とも仲良くしようとはしていた。ただ、俺が好んで仲を深めようとはしなかった。単純な嫉妬みたいなもんだと思う。高校の2年にあがるとクラスの周りの男達は中学の頃も含めて、1年でも一緒だった俺に誇紫のことをあれこれ聞いてきたが、俺は何も知らないと答えた。誇紫はもう俺にだけ

冷たかつたからだ。確かに仲を深めようとは思わなかつたが、少しからかうだけで嫌われるようなことをした覚えもない。

仮に嫌なことをしてしまつたら、良いことをする。プラスマイナスがゼロの関係。貸しも借りもつくるらしい関係。いかにも独りよがりで中一っぽい関係を求めていた。それがシヤクに障つたのだとしか思えなかつたが、結局するすると今まで来てしまつた。

藤咲は美人に分類されているらしくモテる。藤咲の容姿と八方美人のおかげか知らないがもう何十人からも告白されているのを知つてゐる。そのたびにアイツは断つていた。

「今はちょっとその気になれない」とか「友達から始めよつ」とかベタすぎて、あたり障りのない感じで答えていた。

彼女は他に好きな人でもいるのだろうか？  
告白してはいけない相手？  
教師？

それとも俺が嫌いな生徒会長にでも惚れたのであろうか。

「それで、どんな相談だい？ 早く帰りたいから短めにな」

「何で妹と知り合つたのよ」

「それが相談かい？ それなら簡単だ。バイト先に来たから

竜崎はそれを相談と受けとつて席を立ち、帰ろうとした。

「ちよつと待ちなさいよ。それは相談じやなくて聞いただけでしょ」

彼女はまだ話が終わつてないどばかりに竜崎を座らせた。

「わかつたから、用件を早く言つてくれ」

「最近、追いかけられる夢を見て以来、誰かに見られている気がするのよ……」

彼女は先ほどまでの態度と違つて少し暗い顔になつた。

「それは藤咲が八方美人で周りに良い顔ばつかかるからだろ」

「それは、知り合いが多く欲しかつたのよ。何か困ついたら助けて、私が困つた時は助けてもらえるよ」

「ギブ・アンド・テイクか」

竜崎はその考えに納得するところがあつた。

「でも、お前の場合はギブ・アンド・ギブに近いだろ」

「うん。でも、人を助けたりするのは別に嫌いじゃないのよ」

「何で？ 人を助けてもその後に口クなことがなかつたりするし、

労力だけ使つても骨

折り損だつたりするぞ」

竜崎は自分のバイトのことが頭に浮かんだ。

「ウフフ」

三人になつてから黙つていた花桜梨が声に出してうつすらと笑う。

竜崎は夢を消せなかつた一個下の彼女に目をやると、やつにくさを感じ苦笑いをした。

その視線のやりとりを誇張は見逃さなかつた。

「なに妹を見て笑つてゐるのよ。手を出したら怒るわよ」

誇紫は妹の守護神のようだつた。

「何で俺がお前の妹に手を出すんだよ」

竜崎はそう答えた。

「それで話を戻すぞ。追いかけられている夢を見て、それから現実でも監視というかず

つと追いかけられているような感覚になつていて

竜崎は話を戻し、真剣な顔になる。

「うん。そういうことね」

竜崎はもう少し詳しく話を聞いた。

「わかつた。俺にできることは、何もなさそうだから今日はゆっくり寝てみたら? 気のせいかもしれないしさ。気分も落ち着くかもよ。八方美人をやめて八宝菜でも家で食つて寝てろつてことだ」

竜崎は気のせいだということをふざけながらも強調して、あまり深刻に悩まないよう

促したが、藤咲姉妹の姉には逆効果だつたらしい。

「もういい!」

彼女は机を叩くと、席を立つた。

「アンタに少しでも頼ろうとした私がバカだつた」

そういうと彼女は何もわかつてくれない竜崎に怒つて帰つてしまつた。

店内が静まりかえり、一股をかけて喧嘩に発展したと勘違いされた客の視線が竜崎達に集まり非常に気まずい雰囲気になつた。

「八宝菜がいけなかつたか」

「店を出ましょう」

椅子に座つていた妹が言いだしたので竜崎も後に続いて会計を済まそとした。レジに

まで客の視線が突き刺さるので会計の人気が伝票を読み上げ金を払つ

てさつさと店を出る。

そこで竜崎が気づいた。

竜崎は何も食っていないし、飲み物すら頼んでない。食つて飲んでいたのはこの姉妹だけであった。しかも、片方は注文しただけで飲んでもらいなかつた。

「いらっしゃました」

花桜梨は満面の笑みをしていた。

「いや、いいよ。君みたいな客からバイト代ももらつてると答えるも、なぜか損をした気分になつた。

家が同じ方向だったので少し話しながら帰ることにした。

「お姉ちゃんがあそこまで自分のことで怒るのって実は珍しいんですね」

「へえ

竜崎は興味がなさそうな返事をしたが、確かに誇張が学校でここまで怒つてるとこもみたことがなかつた。そもそも嫌がらせをされることもなかつたので、怒るようなことがなかつたと言う方が正確である。

「確かに自分のために怒る姿を見たことがないな。アイツは皆と仲が良いみたいだし。

なぜか俺には冷たいけど……」

花桜梨はそれを聞くと二二二二二笑っていた。

「お姉ちゃんはシタテなんですよ

「え？」

竜崎はシタテだけでは意味がわからなかつた。

「自分の感情を表現するがシタテなんです。無感情だとさすがにマズイ。だから、皆に

一律で良い顔をして怒らなければなりません。やつすれば、誰にも怒られずになおかつ

自分のうまくない部分を隠せる。というわけなんです

花桜梨はそこまで言つと少し暗い顔をした。

「たぶん、それシタテじゃなくてヘタだと思つよ。下手でヘタ」

竜崎は下手をヘタをシタテと読む人を初めて目にし驚いた。

「雰囲気が伝われば良いんです。どっちにしろ、お姉ちゃんが同級生にあそこまで怒つ

たのは珍しいんですよ」

「なるほどね。その溜めこんでたとばつちりみたのが俺に飛んできたと」

「すみません」

花桜梨は頭を下げて謝つてきた。

「いや、いいよ。人間は完璧じやないからどこかしら、欠陥があるし。誰にでもいい顔

をする理由がわかつてよかつた」

そこまで言うと大きな川が「手に分かれる橋にたどり着いた。

「この二股に別れている川を見て思つたんですけど、あの店にいたお客様からは竜崎

さんが二股をかけて喧嘩になつたと思われたんじゃないですかね？」

竜崎も考えていたことを花桜梨も思つていたらしい。

「それ、俺も思つた。気まずくてあの店にはもういけないな」

竜崎は笑いながら答えていたが、知り合いがいなかつたのを祈るばかりであった。

そのまま一人は川の橋を渡り別れた。

私は素直になれない自分に嫌気がさした。  
少し前に彼の冷たさの中にあるやさしさを見てから気になつてしまふがない。

普段は私へ無愛想だけど、時折見せるやさしさ。

今日は妹もいたし、もつぢうしょつもないくらいの失敗、大失敗、超失敗。

あ、カオちゃんに本当にビックリして知り合ったのか聞かないと…。  
…。  
そう思つてこらつちに自分の家にたどり着いた。

## 2

竜崎は少し遅い時間に入つたバイトをさつさと短時間で終わらせる重役出勤もビックリ  
の仕事つぶりで、愛犬のフォンスと首輪を付けずに一緒に寝た。そ  
うすると真つ暗な空間  
の藤咲誇紫の夢の世界にたどり着いた。

「フォンス、人の匂いはするか？」

「ちょっと待つてね」

フォンスは言われ一生懸命に鼻を動かした。

「こっちに微かに匂いがあるよ。でも、変な感じがするなあ

「とりあえず、俺は暗くて見えないから、お前に首輪を付けるか  
らちょっとここに座つ

ら待つてろ

俺はそういうとアグラをかき、太ももをポンポンと叩いた。その  
音に頼りにフォンスは

俺の足の上に丸くなるように座つた。

そこでフォンスを足に乗せ座禅を組む様な形になると、そのまま  
フォンスの首に首輪と  
ひもが浮かび装着された。

「よし、これで大丈夫だ

「じゃあ行くよ」

フォンスは鼻を地面に擦りつけるぐらいの低位置で匂いを嗅ぎながら歩き始めた。

暗闇の中を歩き版犬ぞりのよつに引っ張つてもうこ歩いていくと、やつと光の空間が見えてくる。

そこは人の顔がたくさん貼つてある場所のよつだ。

「なんだこの空間は」

フォンスに話しかける。

「なんなんだらうね」

そこには鏡でよく見かける顔写真もあつた。

「俺のじやねーか。それに何で俺のだけ隔離してあるんだよ」  
『WANTED』と書かれた額にわざわざ飾つてある。

俺はここまで藤咲に嫌われているのかと思い愕然とした。

「人の匂いともう一つ匂いがあるよ」

フォンスがそう言つとそつちの方へ歩き始めた。

フォンスについて行くと、見覚えのある一人の美しい女性が追いかけられている。

追いかけている方の顔にも見覚えのあるが名前が思い出せない。

「またまたー。逃がさないぞー」

「キヤー来ないで。こわいー」

追いかけられながらも笑い合つて、夕日が沈みかけている海岸のワンシーンとは程遠い

光景だつた。そんな光景を見せられたら間違いなく俺は浜辺に落とし穴を作つてカツブルを上から砂で埋めている。

俺が今見ている光景では必死な様子で逃げる女と性欲丸出しで追いかけまわしている男の姿にしか見えない。

「おーい、藤咲。これがお前の見ていた夢か?」

「何でアンタがいるのよ」

女の方はビックリしながらも俺を見て嬉しそうな顔をしていた。

「なんでつて言われても、ここが寝てているお前が見てている夢の世

界だからとしか言いよ

うがないな。それよりも「コイツ誰?」

確認を込めて藤咲に聞いた。

「この人はウチの学校の生徒会長の井家さん。<sup>いけ</sup>アンタはいつも寝てるから、そんなこと

もわからないのよ」

この他にも藤咲はブツブツ話していたが、俺には聞こえていなかつた。

「それで君は誰なんだい?」

「俺は単なる通りすがりのあの人知り合い。それに彼女のことはそんなに知らないの

でご自由にどうぞ。それより何で必死に追いかけてんの?」

「それは僕が告白しているのに彼女が逃げるからだよ。僕がせつかく好きだと言ってあ

げてるのに……」

「私は断つたじゃない

「ふーん」

俺はその色恋沙汰には面倒だから全く興味はなかつたが、相談された以上は無視するわけにもいかない。仕方なく少し下がつた位置で一人を見ることにした。俺は一回失敗しても2回、3回と思い告げて成功して例を知つてているだけに他人のやることに口を出すわけにはいかなかつた。

幸せそうな二人だつたら野次を飛ばしている。間違いない。

私は一生懸命逃げている。

現実の世界であつてもずっと誰かにつけられている感覚はあつた。でも、ここだとハツキリと誰が追いかけているのかわかる。前に告白されたけど、興味がなかつた。

だけど、興味がありませんって断るのは気が引けた。

だから「よく知らないので友達から始めましょう」と答えた。

それからだつた。

彼につけられている気がするのは。

最近では夢にまで出てきて、追いかけまわす。

正直、大嫌い。

でも、それを直接言つことはできなかつた。

学校で愛想よくふりまして、それを言つてどうなるのか怖かつた。  
でも、今日は竜崎君がいる。

彼ならきつとなんとかしてくれる……

彼なら追いかけてくる変態を撃退してくれそうな気がする……

早く、早く、早く、助けてよ……

何で助けてくれないのよ。

何で見ているだけなのよ。

あ、とうとう捕まっちゃつた。

顔が近づいてくる。

そしてなんだか獣みたいな顔に変わっていく。

まるでアフリカにいる百獣の王のような顔いっぽいの毛。

あれ、これって本物のライオンみたいじゃない

私の服にするどい爪がふれている。

どうやら私は服を破かれ嫌な思いをするらしい。

もう、嫌だ。

私は大声を上げて叫んだ。

「アンタなんか大ッきらい！ 近寄らないで。助けて竜崎」

「おせーんだよ。タコ」

ゲームの主人公のようなかつこうをした竜崎が後ろからライオンに剣で切りかかる。

その光景を見ながら私は恐怖と安心感で気を失つた。

俺は藤咲の叫びを聞く前から準備はしていた。

藤咲が嫌いではなかつたが、誰にでもいい顔をするのがあまり好きではなかつた。自分自身にはできないから羨ましくもあつたけど、別にそれができなくとも困ることはない。

バイトで世渡りを多少は覚えたし。

それに相手が生きている人の形である限り、基本的に手を出すことはしない。

「よお、ようやく化けの皮がはがれたな。エロライオン」後ろから切りかかつた俺の剣をとっさに避けたライオンに話しかけた。

「お前は何者だ」

「答える必要はない」

剣をかまえ、相手が少しビックリした顔するぐらい加速で斬りかかるが、さすがに野生の勘の反応には敵わず避けられる。じつじつと巨大化の足輪をしておいたフォン

スが藤咲を口でくわえ遠くへ行く。

俺は横目で逃げて行つたフォンス達を見ながらこの怪物とどう向き合つのか考えていた。

奴はライオンの攻撃性に野生の強い性欲を兼ね備えてかなり強化されている。まともに

やりあつたら俺が負けそうなデータだけはそろつた。

お返しとばかりに今度は井家が突っ込んできた。

爪が当たるか当たらないかのギリギリで交わしたつもりが、少し服を持って行かれた。

「あぶねー」

距離を取らないとちょっと危ないと感じ、さつきの距離より間合いをとつた。

「きさまは何で邪魔をするのだ。さつきは関係ないと言つていたではないか。今ならお

互い何もなかつたことにしよう」「う

井家は余裕をチラつかせて話しかけきた。

「悪いけど、ここで手を引くとか、そういうわけにはいかないんだな」

「なぜだ？」

「さつきの叫びで助けを呼ばれちまつたからな。それに誰にでもいい顔をすることの危

なさを感じてやめてくれると思つから、そろそろアッシュに貸しても作ろうかなつて思った

のを」「ほう。だが、永久にこの空間に出てこらなこよう元気にしてやれりつ。

そうすれば今から歌

詞を作る必要もなくなるだろ」

「いつ俺は作曲家になつたんだい？」

百獸の王は俺の言つことを聞く前に心臓を手掛けて全速力で突進してきた。

剣をかまえたが、たつた一步しか動けなかつた。

だが、一步さえ動ければ俺には十分であつた。

左足を後ろに反時計回りに動かしながら一直線に来るライオンに

対し、体を平行に並べ

る形にしてそのまま剣を振り降ろした。

「見事である

俺は風の通り道の先を眺め、そんな言葉が耳に入る。

「が、私はその程度では倒せんぞ」

「さすが王様つてところか」

俺は笑う。

「何を笑つているのだ？」

百獸のライオンは俺へ向きなおして聞いてくる。

「かつこよく勝とうと思つたけど、無理になつちやつたんだもん」

「どうか。そんな貴様を笑いながら血だらけにして、あの女の前

に捨ててやる。やつし

てあの女は俺のもんだ」

そういうと、男らしい低い声で笑いだし、井家と呼ばれていた怪物は俺へ突撃してきた。

手元にあるもの出し、それを真横に投げた。

「うお、しもふり肉ゲット！」

よせん、ライオンはライオンであった。

いくら強くてもサバンナで暮らしている限り貴重な食い物にはつられる。

俺の目の前で方向転換をし、真横で肉を頬張る。

その瞬間に俺は間髪いれず躊躇なく、首を落とした。

「悪いな。人は知恵を使わないと勝てないんだ」

そういうと獣に目をやり、近くにあつた光る石を見つけた。

何気なくポケットに入れると口に親指と人差指しをいれ、音を鳴らした。

しばらくして、彼女を連れたフォンスがやつてきた。

「さつきのピーって音なに？」

「いつもやつてるのに、かつこつけて口笛ならしたみたいじゃな

いか」

そのまま口にくわえられているまだ眠りから覚めていない女に目がいった。

「起こす？ そのまま勝手に起きてもらう？」

「どちらにしろ、ここで首と体が分離しているやつの処理をしないといけないから起こすぞ」

フォンスの口からやさしく離れ、地面に置かれた同級生を見た。俺は彼女のこと気にしないようにはしていたが、こうしてみると随分と魅力的である。

赤いチェックのパジャマを着て体つきは出でているといふは出でている

し、気を失つてゐると

はいえ寝顔はとても美しかつた。

俺はそんな藤咲誇紫を見ていて、顔が段々赤くなつていいく。

そこでフォンスが顔を舐め起こした。

「ん~」

彼女は眠そうに眼をこすりながら起きた。

俺は意識がハツキリする前に見とれていた自分を隠し冷静な顔に戻す。

「起きたか?」

「何でアンタがここにいるのよ!」

デジヤヴのような気がしたので聞き流す俺。そしてわざわざ説明し直すフォンス。

「わかつたけど、何で犬がしゃべつてるの? しかもデカイし

俺はそれを聞き、足につけてた足輪を外した。

「夢の中だからなんでもアリだる」

「そうね」

彼女はなぜかこの一言で納得したようであつた。なぜ素直に納得するのか俺にはわからなかつた。きっと素直なんだろうと思つ。

「よろしく」

フォンスは丁寧に挨拶をした。

「これがアンタの家で飼つてているつていう犬?」

「そう、フォンスつていうんだ」

「何か犬と話すつて不思議な感じ」

俺はちょっと前にも同じ反応を見ている。

そう考えながら、フォンスとじやれている誇紫の姿を眺めていると時間がどんどん過ぎ去って行つた。

しばらくたつと彼女が思い出したような顔し、頬のあたりを赤くしていく。

「ありがとう。かつこよかつた

「お、おう。気にすんな」

そっぽを向いて答えた。田を見るとあのライオンと変わらなくなつてしまいそうであつ

た。それほど、藤咲の魅力に氣づいてしまつた自分に氣づく。

「そのさ、モテるのはわかるけど、断るならハッキリと断らないとダメだぜ。友達から

とかまだ望みがあるようなことを言われると、俺たち男子は諦められないで、またこうい

う怪物みたいのが出てくるぜ?」

「わかつてゐる。こんなことになるんだつたら、今度からハッキリと断る。それにもう回

りくじい言ひ方をする必要もなくなつたし」

そういうと彼女の田は生き生きとしてきた。

そこまで聞くと俺はさつさと作業に入ることにした。

「とりあえず、お前の田の前にいるライオンもどきを消すからこれつけて」

そういうと、フォンスの首にある袋から、つむぎをひいて御札の形をしたシールを取り出

し、藤咲に手渡す。彼女は特に考えずに胸元に貼る。

もう一つ袋から取り出し、首と体が別れている動物に貼りつけた。そこで、さらにフォ

ンスの首にかかった小さな袋から、象形文字が書かれている紙を取り出し地面に置き、呪文のような言葉をつぶやくと光り始めた。

「よし、終わつた

そういうとライオンの存在はこの空間から消え去り、彼女の記憶からも生徒会長がストーカーであったことは忘れ去られた。ただ、そこに残るのは元の姿への少しの嫌悪感のみ

である。

こうした儀式じみたことをしないと、性欲に駆られて野獣になつた生徒会長へ影響を与えられない。これで生徒会長への干渉もでき、話を聞かなくて仕事が行えるので一石二鳥であった。

「不思議な幻想を見ているみたい」

藤咲はそういうとボンヤリ眺めていた。

俺が何をやつているのか、なぜ光っていたのか、そもそも夢だからと言つてなぜ俺が出てきたのか。第一、なぜゲームのような服を着ているのか。夢とはいえ、何でもありの状態になつているのが全く理解できていないと言つた様子である。

「最後に

そういうと俺は爆竹を取り出した。

「それ、何？」

「知らなくていいもの」

そういうと、体が段々と薄くなりビームからともなく声がしてきた。

「お姉ちゃん起きて~」

藤咲花桜梨が起こしに来たらしく。

この空間が揺れている。

体を揺すつているみただ。

俺は爆竹で消せないのなら夢の内容を「まかす方法はないかと考えたが、見つけられなかつた。

「じゃあね、広界

そう初めて下の名前でいうと彼女は微笑んでいた。

竜崎眠い目をこすりながら時計を見るとまだ朝の4時であった。

「あの妹、なかなかの曲者だな」

首輪を机の上で見つけ、寝ていたフォンスに巻きつけもう一眠りする態勢に入り、誇紫が夢落ちだと勘違いすることを願い一度目の眠りについた。竜崎にとつて一度目は寝てないに等しいのだが。

「今は何時だ」

久しぶりによく寝た気分になり、時計をみると針は10時を指している。

学校がある日なら間違いなく大遅刻であるが今日は休みであった。竜崎は惰眠をもつとむ

さぼりたかったが、さつきから何かが激しい音を立て、不快な気分にさせる。

携帯がバイブでずっとなつていたが番号を見ると竜崎の知らない十一桁の数字が映つて

いたので、もつと不快になつた。

めんどくせえと思いながらも仕方なく竜崎は電話にでることにした。

「何で電話にでないのよ！」

どこかで聞き覚えのある声がなぜか怒つている。

「いや、この番号知らないし」

竜崎がそういうと黙りこんでしまつた。

「わ、私よ、藤咲。藤咲誇紫」

竜崎は声を聞けばわかる、と言つてそうになるが余計なことは黙つておくことにした。なぜなら面倒だからだ。

「とりあえず、土曜日は空いてるわよね？」

「いや、その日は友達の加藤健介の命日で……。あいつは良い奴

だつた

少し涙ぐんでみせた。

「バレバレの嘘をつかないでよ。同じクラスなんだから嘘だつてことわかるわよ

適当なことを言つもやはり当然のように見破られた。

「じゃあ、お母さんがたつた今死んで……」

「じゃあつて何によ。じゃあつて。嘘をつくならつまめく」まかしながらいよ

彼女はそういうてきたが、竜崎は溜め息しかでなかつた。

「土曜日の朝9時に時計塔の前ね。話があるから。じゃあね」一方的に電話を切られ、何がなんだかわからないままで用事を入れられてしまった。

竜崎は部屋を見渡すと、寝ている間に妹がフォンスを下に連れていつたらしく、部屋にはいなかつた。

下に降りると、奈緒がリビングのソファーで横になつていて漫画を読んでいた。そのソファーの下でフォンスが丸くなつていていた。相変わらずのふてぶてしさに、軽い蹴りでもいれたくなつた。

「お兄ちゃん。おはよう。」

「おはよう。母さんは？」

竜崎は冷蔵庫に入つて、菓子パンを食べ始めた。

「どこかにでかけた」

そういうと奈緒は足元を見ている。

「フォンスを勝手に降ろして散歩に行つちやつたけどいいよね？」

「別にいいよ。」「イツ重いし

遠回しに、テブと言つたのがわかるのかフォンスはチラつと竜崎を見てフンッと鼻を鳴ら

していた。

その後竜崎はさつさと食べ終わると奈緒に聞きたいことを聞いた。

「ところで、藤咲花桜梨って知ってる？ たぶん、同じ学年だと

思うんだけど」

奈緒はきょとんとした顔になつた。

「知つてるも何もしらない方が珍しいわよ」

「へえ。どんな子なの？」

奈緒は咳払いをすると説明を始めた。なぜか白衣に牛ビンのよつなメガネ姿の妹が竜崎

には目に浮かんだが、錯覚であると信じ話を聞き続けた。

「ようは、美人姉妹つてことね」

「そう。姉の方はお兄ちゃんのクラスにいるはずだよ」

「知つてる。すっげーモテてる。ありや八面玲瓈れいろうで大変だぜ」

「お兄ちゃん、何で素直に発砲美人つて言わないで、難しい言葉を使うの？ 何か隠してるでしょ」

「銃で発砲する美人がどこにいるんだ。ここはアメリカのハリウッドか？ それとも映画の中か？」

竜崎はなぜバレたのかわからなかつたが、妹のボケた言葉に助けられそのまま洗面所へ

行き洗顔をし自分の部屋に戻つた。竜崎は自分だけの空間に戻ると、パジャマ替わりに使つていて、ジヤージから着替えはじめた。

藤咲妹の話を聞くと、あの場面でわざと起こしに来るような人は思えなかつたが、おそらくわざとで間違いないだろ？。口曜日に呼び出したのもきっと、それで何かするため

に違いないと竜崎は感じた。姉をけしかけて何かを集たがる気だ。

「姉妹だけに始末悪いな」

竜崎は言葉遊びで係つてないのに、うまいことを言つた気になつ

ていた。

せっかくなのでもう一回睡眠をとつて三度寝をしたがつたが、段々と気分が重くなつていくのを竜崎は感じた。

翌日、学校に登校すると藤咲誇紫と田があつと、藤咲はすぐに田をそらしてしまつた。

隣に座つていた加藤がその様子を見て話しかけてきた。

「コウちゃんなんかしたのか？」

「しない。なぜか、俺だけには冷たいからな」

そういうと加藤の視線が竜崎を捉え続けていた。

「誰の話してんの？」

「ほえ？」

竜崎は間抜けな反応をし、廊下をみると妹と最近知り合つたもう一人の女子の二人が立つていた。

「俺が言つてるのは廊下にいるコウちゃんの妹だよ

「俺は不幸な腹痛になつて休みだつて、奈緒の隣にいるのに伝えといてくれ。」

竜崎はそう言い残し、後ろの方の席からベランダへ急いで出て隣のクラスに入り、そのまま廊下に行き、トイレに逃走した。

息を切らせ、トイレの個室に駆け込む。まるで、大きい方をしたくてたまらなく駆け込んだ様に周りには見えるが、本人にしてみればそんなものは一の次である。

おい、どうなつてんだよ。

何で、あいつは妹を連れて教室にきやがつた。間違ひなく狙つてやつてやがるぞ。

姉妹揃って俺をびっくりよいつてんだ。

あの妹が藤咲に「いいおもちゃが見つかった」とでも言つたんだ  
るい。

何で助けたのに俺がこんな目にあわないといけないんだ。  
関わった俺が悪かつたのか。

一瞬でも誇張を見直そうとした俺が馬鹿だった。

馬みたいに口に銀のはみをされ手綱でも付けられ、奈良公園の鹿  
みたいに角を切られて。

あ、でも角はないから別の危ない固いところを切られ、四本足で  
歩かれるだろうか。

何でそもそもアイツが俺の番号を知ってるんだ。  
ますます意味がわからない。  
さて、どうする。

竜崎は自問自答していた。

そこで彼は誠心誠意ゴマをすることに決めた。あのうわんくわ店  
の店長に逆らえ、何  
をされるのか検討がつかないので、びっくりよつもないのがわかつて  
いた。それならあの姉  
妹にゴマをすてる方がマシであった。

竜崎はチャイムが鳴り少しあつてから、帰つたと確信できてから  
教室に戻つて行つた。

当然のようすに担当の先生からは怒られたが、それどころではなかつ  
た。

1

俺は帰りに下駄箱を開けると中に前に見かけた感じがする手紙と『家に帰つてから読んでもください』とPCで書かれ、印刷されたであろう一枚の紙が入っているのが見えた。

「おい、また不幸の手紙かい？」

「わからん」

嫌な予感はしていたが、カトケンに感覚的なことを言つてもしうがないからそのまま鞄に入れて下校する。下校途中に人通りが少なくなり、とても氣になつていた中身を確認なつて、中身を確認するとやはり不幸の手紙であつた。

『明日は現金たくさん持つてきてね。遅刻したらわかつてゐるよね？』から続く、文章が

連なつて書いてあつたが、もう読む氣すらしなくなつていた。もちろん、拝啓などの固い手紙で使われるような言葉は一切書かれていなかつた。

「帰りに見たな～」

その代わりに後ろの電信柱の陰から何かドス黒い声とオーラを感じ、恐る恐る後ろを振り返つても誰もいない。

そして差出人は書いていなかつたが、なんとなく見当はついた。

「あの姉妹は俺をどこまで追い詰める気なんだよ……」

結局、竜崎はこのまま眠れずに朝を迎えてしまつ。

「面倒だ……」

竜崎はつぶやきながら首輪をしたフォンスと一緒に下へ降りると、普段は家で部屋着し

かきてない妹が少しハデな外行きの服を着ていた。

「みんなおはよう。あれ、奈緒どつかでかけるの?..」

「うん。友達とね」

妹は随分とウキウキしているようであった。

「お兄ちゃんも今日は早いね。どうか逝くの?..」

「まあちょっとねつて何でそつちのイクなんだよ。俺はまだ墓には行かないぞ」

「てか、いつもより眠そうだよ?..」

「いつも通りだ」

これから金を脅し取られに行くといつ哀れな兄の姿を見せたくないのか、そういうと朝

「はんを食べ、着替えて竜崎は出かけた。

俺は時計塔の前に三十分前につき、近くにあつたベンチに腰をかけると、ふと眠くなつてしまいそのまま寝てしまつた。

「ねー、起きなさいよ」

誰かに肩を揺すられ、起しきれている気がした俺は目を開けると、そこには藤咲誇紫が

制服とは違ひオシャレな姿で立つていた。

「肩まで揺すつて、金まで揺する気か。お前は鬼か!..

俺は寝ボケた頭で考えられる限りの嫌味とトンチを聞かせて言つてやつた。

「は? もう行くわよ」

そういうと藤咲はサッサと歩いて行つた。

無言のまま行きついた先は映画館。

「あのー何の映画なんですか？」

俺は恐る恐る聞いた。

「なに急に他人行儀になつてるのよ」

そういうと彼女はうれしそうに割引券が付いたチラシを見せてきたが、タイトルを見て愕然とした。

「地獄への13階段～序章～」

俺はその文字を見て復唱をした瞬間に悟つた。俺は今までの生活以上におかしな高校生

活が今日から始まるんだと。

「そうよ。ホラー映画よ。あんた嫌いなの？」

「いや、大丈夫です」

と苦笑した。チケット売り場で並びどんどん前へ行く。

「高校生2枚」

藤咲は指で2を作り、笑顔でチケット売り場の人々に注文していた。

俺には「これから地

獄におくつてやるぜ」つて笑いながらピースしているようにしか見えなかつた。地獄へ送

られるのは映画の人ではなく、俺です。

周りで見ている男どもは「あんなかわいい人と一緒に歩いてるのに何で楽しそうじゃな

いんだ。ひょつとして緊張して寝不足だったのか？」つて視線を送つてきている。寝不足

は認めるが、死刑執行に向けて着々と準備されているようにしか俺が思えないのは誰もわからないらしい。

指定された席につき、藤咲は通路側を俺に譲つてきた。

「逃げたらわかつてんんだろうな」と受け取つた俺は元々ほとんどなかつた逃げる気も

完全に失せていた。

俺にこの映画を見せて恐怖のどん底に落とす魂胆であつたところ  
のはタイトルを見た時  
からわかつていた。

映画が始まると辺りが真っ暗になり、眠くなつてしまい俺はここ  
もあらうか、執行官の  
隣で寝てしまつた。

「ここは夢の世界か」

俺はふとフォンスが居ないことに気が付いた。  
最近は他人の夢に行つてばかりであったが、今度は自分の夢にき  
たらしい。

どうやら、田の前で五円玉を糸で釣つてそれを振り子のように操  
つているやつが、俺の  
この夢の元凶らしい。

「おい、何やつてんのお前」

「拙者は貴様がますます眠くなるように催眠術をかけていくとい  
うだ」

「これ以上眠くになると困るんだけどさ」

五円玉で催眠術自体、だいぶ古こと思つたがわざわざ口ひげを出さ  
ない。

面倒だからだ。転がり込んでくる面倒な事であればしじつがない  
が、自分から面倒なこ  
とに関わろうとは思わない。

「だから、催眠術をかけてるんだらう」

「えつと、まずゲームと勘違いしてない？」 催眠術で眠り状態に  
なるのは初代が151

匹のモンスター達を戦わせるゲームとかだぞ」

「じゃあ、これはなんだんだ！」  
なぜか逆切れしてきた。

「 知るか！」

俺もわからないと説明してやり、なんとなくむかついたから十足で人の夢に出てきたことを後悔させてやるうつと思つた。

俺は手に西洋風の剣を取り出し、田の前にいる間抜けな黄色のバクのような恰好をした動物を真つ二つにした。

「 睡眠欲ぐらい、元々あるわ」

俺がそういうと、さつきまであつた5円玉の代わりになぜか木の枝が落ちている。

それを龍崎はバキつと踏みつけへし折り、眠りから覚めるのを待つているとボンっとい

う音がし、透明に輝く石に変わった。前にも見たことがあったので拾い上げポケットにし

まうと今度は叫び声が聞こえた。

手から剣が急に消えてしまったので、どこから来るのはわからな  
い敵に向けて、仕方なくボクシングの要領で構えた。

「 アンタ何やつてんのよ」

龍崎は映画の最中に悲鳴を聞いて、寝ぼけて立ちあがると両手を胸元の上までもつていいき、これから殴り合いが始まるかのような雰囲気を出していった。隣に座っていた真っ赤な顔をした藤咲に手を引っ張られ慌てて席につかされると龍崎も顔が真っ赤になつた。

映画が終わり、藤咲は激怒していた。

それもそのはずである。

あの後、映画の最中とはいえ、ずっと周囲から見られている気がしていたからである。

「恥ずかしいじゃない」

藤咲はそういふと下を向いてしまった。

「『』めん。寝不足でさ」

「楽しみにしてたのに……」

そういうと泣き出しそうな顔になってしまった。

竜崎は、藤咲が楽しみしていたのはこれから始まる人から金を搾り取る惨劇であろうと

思っていたが、彼女にこのまま泣かれるのはさすがに悪い気がした。カバンに入っていたハンカチを渡し、そのまま藤咲の腕を引っ張りそのまま近くの店に入つていく。

「昼、食べに行くな。お前が言つたように持つてきたからだしてやるから。ファミレスでいいよな？」

竜崎がそういふと、藤咲は田に一、三回ハンカチを当て竜崎の後に続いた。

2

女子にあんな顔をされたら、諦めるしかない。それにしてもと、竜崎は考えた。

よりによつて、値段が高いファミレスに来てしまった。

「本当にね『』つてくれるの？ 悪いから自分の分の半分は出すよ？」

「出しても自分の分の半分かよ。いいよ、一度言つちやつたから

全部出すから」

そういうと藤咲は「『』と喜んだ様子でメーラーから選び始めた。

「アンタは決まったの？」

「大体、決まった。とりあえず、アンタって呼び方はやめてほしい」

「じゃあ、アンタもお前つて言つのやめてよ」

そういうと藤咲は呼び名を考えた。

「じゃあ、ヘッポ「戦士」

「帰れ」

「じゃあ、ゲリP.i.i（自主規制）」

「言葉が隠れてないぞ。それにもう忘れてくれ。しに行つたわけじゃないから」

竜崎は藤咲の口から出でてくるセンスのセの字もないあだ名を却下していった。

「わがままだな～」

それまでに出ていた全てを却下されると藤咲はアゴに人差し指をあて考え始めた。

「ザッキー！」

これならマシに感じた竜崎は「これで手を打つ」とした。

「私は下の名前で呼んでくれていいよ」

「わかった。古紙」

「私はリサイクルの使い回しじゃないわよ。ザッキーなんだからゴッキーでいいわよ」

そういうと、藤咲は店員を呼びメニューを頼んだ。

竜崎は学校で急にあだ名で呼び合つたら色々と聞かれて面倒なことになると頬杖をついた

ていたが、考へてもしそうがないのでトイレに行くことにした。

彼がテーブルに帰つてみると見知らぬ男が藤咲に話しかけている様子を目にする。

店員さんがやってきた。

竜崎は料理を待つてゐる間にトイレに行き、帰つてみるとテーブルに見知らぬ男がたつて

いて、藤咲に話しかけていた様子を見ていた

「チツ連れかよ」

男はそういうと、立ち去つた。

「知り合い？」

「いや、知らない人。ナンパじゃない」

「学校でも外でもモテモテですな、コツシーさん」

竜崎はそう言いながら席についた。

「ザツキーも居眠りしてばっかしてるんじゃないくて、頑張ればモテるんじゃない？」高

校に入つてから授業中によく寝てるみたいだし」

「ほつとけ。ふるがみ」

そういわれ藤咲は少しふくれたが、同じクラスにいてもお互いに話すことがないため、

なんだかんだ次々に話題がでてきて一人で盛り上がり続けていた。料理が来てからも話は続き、

盛り上がつたまま食べ終わると、藤咲はカバンから近くの遊園地のチケットを取り出した。

「これ、今日までだから良かつたら行かない？」

「いいけど、他の人と行けば良かつたじゃん。俺より良い人いただろうに」

竜崎がそういうと、急に藤咲は機嫌が悪くなつたのか少し乱暴な口調になつた。

「私と行きたくないのね。わかつたわよ。あの妹と行けばいいじゃない。妹に教室に来

られて、デレデレするのを見られたくないから来ないようと言つているシスコンのぐせ

に！」

彼はなぜシスコンと言われているのか理解できなかつた。来てほ

しくないのは、あの妹

は田立つからそれ目当てで声をかけられても面倒だからだ。

「何で、妹をしつてるんだよ」

「ここの前、カオちゃんと教室に来た時に紹介されたのよ。脱兎のことく逃げ出したのは

黙つといったから感謝しなさい」

「あれほど、来るなつて言つといったのに……」

竜崎は溜め息をついた。

「何で来てほしくないのよ」

「言いたくない。ところで何で、お前の妹がわざわざ誇張に紹介しに来たんだ？」

竜崎はさりげなく探しをいれた。  
さく

「逆よ。ザッキーの妹、奈緒ちゃんだつけ？ ウチのカオちゃんをお兄ちゃんに紹介す

るんだつて言つてたのよ。どういうことかしらね？」

さつきまで温和な雰囲気だつた、藤咲のオーラがドス黒いものに変わつていいくのを竜崎

は感じた。

「いや、ほら。ここの前会つたろ？ それだよそれ。一応、相談された側だからどんな様

子かなつてさ。バイト先に来たからアフターメンテナンスみたいなもんだよ。アハハ……」

少し後ろにのけぞりながら答えた。

「へえー。妹をアフターメンテナンスですか。何をメンテナンスするのかな。まさか体

じゃないわよね？」

「あ、それはない。年上の方が好きだから」

竜崎は藤咲が拍子抜けするぐらいいあつけらかんとした口調で好みを言つた。

「まあ、いいわ。それでバイトつて？」

「相談員。うさんくさい店こいつをとんでもない店長こいつをとんでもない店員。これが揃うとなぜ

か人が集まる。ほら不思議

「全部うさんくさいじゃない」

「だって、本なんだもん」

「まあいいわ。それで妹はどんな相談をしてたの？」

「守秘義務があるからこれだけは言えない。家族にもね」

竜崎はそれが絶対防衛線であることを田で訴えた。

「妹が感謝してたから、どんなことだったのか気になつただけよ。ありがとう」

竜崎は「あの妹が感謝してただと？」嘘付け！」と喉から出そうになつたのを口に手を入れて無理やり抑えた。

そして昼食前に思つていたことを聞いた。

「ふがふが言つてるんじゃわかんないわよ」

手を入れたまま話そうとしていた竜崎を藤咲が笑う。

慌てて手を抜き、竜崎は真剣な眼差しで藤咲を見つめる。その視線に藤咲は顔を赤らめた。

「金持つてこいとか言つてたけど、いくら俺から取る気だ。妹だけには手を出すなよ」

「何よ、ジツと見つめて。それにいくら取るつてなんのこと？」

「お前ら姉妹が俺から金をとる気だろ。下駄箱にお金をたくさん持つてこいつて書いてあつたのはそのためだろ」

藤咲は口を魚みたいにパクパクさせながら首を振つていた。どうやら何も知らないらしい。

「私は、単純にザツキーにお礼がしたくて誘つたのよ」顔を真つ赤にして下を向いた。

「へ？」

竜崎は拍子抜けしてしまつた。

「妹のこともあつたし、それに妙にリアルな夢に出てきて助けてくれたのよ。ザツキー」

が「

最後は消え入りそうな声でそう言った。

竜崎はドキッとはしたが、それを表に出すわけにはいかなかつた。

「ほら、行くぞ。遊園地」

そういうと、竜崎は氣を紛らわすように席を立ち会計をすませると藤咲と二人で遊園地へ行くために店から出て行つた。

3

この遊園地は街の中にあるとはいゝ、なかなかの広さをしている。立地がますます良いためにチケットの値段がはつきり言って高い。

だが、午後からだと

チケットの値段が時間ごとにどんどん下がつていくために子供連れの親子も昼ぐらいから

でもどんどん入園していく。竜崎達は藤咲がチケットを係りの人へ渡し、入園した。

「まず、何乗ろうか?」

「何でもいいぞ」

「じゃあ、ジェットコースター乗ろう!」

そういうとジェットコースターの方へ歩いて行つた。

テーマパークの代名詞のジェットコースターの乗り場は人であふれていた。

前を背伸びで見ても先が見えない。待ち時間を見てみると三十分となつていて。

「どうする?」

「んー、他にしようか。あんまり人がいなさそつな、コーヒーカップに行こうよ」

一人はコーヒーカップには並ばずに乗り込んだ。

藤咲は椅子にちょこんと座っていたので、竜崎は調子に乗って、すごい勢いでハンドルを回し始めた。ぐるんぐるんと台風のよみに回つて、

「田が回るよ~」

藤咲は笑いながら竜崎をみたが、回しまくつていた本人の顔が真っ青になり、ひきつっているのがわかつた。

「どうしたの?」

心配そうな顔で竜崎に聞いた。

「寝不足だつたのに調子乗りすぎた。気持ちわるオエッ」

竜崎は少し涙目になり今にも吐きそつだつた。

乗る時間が終わり、フラフラしながらベンチまで行き座つた。

「う~気持ち悪い

彼はベンチの上の縁に腕を乗せ、天を仰いだ。

「前もつて言つてあつたのに、何で寝てないのよ」

「いや、これから脅迫される高校生活が始めると思うと、恐怖で寝れなかつた」

昨夜から思つていたことを素直に述べた。

「ばか!」

「俺は成績だけならお前と同じぐらこだと思つや」

「そういう意味じゃないのよ」

藤咲は溜め息をつくと、竜崎がしばらくベンチに座ることになるので飲み物を買いに自販機へ出かけていった。

しばらくすると、藤咲が竜崎の元へ戻つてきた。

「一人で遊園地に来たと思われて変な人に見られたぞ

「それは顔色はが多少よくなつたけど、白い顔でいたら不審者に見られるわよ」

はい、と手渡された緑茶を飲む。

「何でコーラにしなかったの?」

「気持ち悪い人に炭酸なんて飲ましたら大変なことになるでしょ」

「さつすがー。気配り上手な八方美人さん」

「もうー。やめてよ」

藤咲はそういうと竜崎の隣に座つた。

どうやら、ここでは藤咲は目立つていて見られるたびに時より下を向く。

「着ぐるみでも来て、顔でも隠せば?」

「何でよ。私は今までそういうことしてないの」

「姉妹揃つてハーフつてのも大変だな」

「ハーフって言わないでよ。私達は半分じゃないの。ミックスよ」

「そうだったな。ハーフって言わると嫌がる人がいるのを忘れてた。それに日本じゃ

閉鎖的だから余計に目立つもんな

「だから、目の敵にされて嫌われないようにしておきたいと してるんじゃない」

やっぱり藤咲の妹は見えてるようで見えてない、と竜崎は感じた。

「まあ、誰にでもいい顔をして愛想をふりまくのは、八面玲瓏み

たいに良い意味で使わ

れないで、悪い意味で使われるハ歩美人だつて見ている捻くれた奴

もいるつてこつた。誰

とでも付きあえるのは良い事だけど、逆にいえば誰にでもいい顔をしてるつて見られるんだよ。特に、藤咲は目立つから」

「ひねくれてる本人に言わると説得力があるわね。参考になつた」

「うるせーやい。参考になつただけで十分だ」

竜崎はそついつて藤咲の方とは反対方向を見て腕組みをした。

しばらくゆつくりと休むと気分が良くなってきた竜崎は聞き覚えのある声を耳にした。

その声の方を見てみると、見覚えのある顔が二つほどあった。

「藤咲、あれって」

竜崎は思わず、指をさして隣に声をかけた。

「あれ、力オちゃんじゃない。それに妹さんも。後は……おいおい、と竜崎は思ったが、既に立ち上がり動こうとしていたのを必死に抑えた。

「やめとけて、目立つんだから」

「ザッキーは妹が男と一緒に良いわけ?」

藤咲は竜崎に聞いてきたが、竜崎は当たり前のよつに言い放った。

「コツシーそれは愚問だよ」

チッチと人差し指を左右に振る。

「後で、一緒に居た男達を陰に引きずりこんで処分するんだよ」

「なかなかヒドイ」とするわね。直球で勝負しないのね

「日本人らしいだろ? 周囲の田を気にして直接言わず周囲から攻めていくのは」

竜崎はニヤリと笑つた。

「まるで昔の城の水攻めみたいね、ジワジワとやる感じが」

一人で不気味な笑いをしていたが、お互いの妹たちを見失う。

「色々な乗り物を乗りつつ園内を探してみるか。せっかく来たんだし」

竜崎はそういうと藤咲と歩き始める。

「あれ、やるか?」

竜崎が少し歩いたところで指さした先にはバンジージャンプがあつた。

「え、あれはちょっと妹も探さないといけないし……」

藤咲が少し躊躇するも竜崎はバンジーへ向けてどんどん歩いて行く。

「ザッキー怖くないの?」

「別に俺はスカイダイビングもやつてるし別にあれぐらになら怖くはない。ゴムが切れ

て「ゴムなしバンジーじゃなければね」

と、竜崎が少しからかい半分で口に出すと、藤咲は元々なかつたやる気がマイナスの値にまで下がつたらしく、近くにあつたベンチに座つて待つていると

言った。

竜崎はゴムをつけ、係りの人の合図で3、2、1、ゴーの後に迷いなく飛び出す。

両手を広げ、そのまま飛び出す姿は鳥が海の中の魚を捕るために急降下するように綺麗

な形であった。その姿を見ていた藤咲はしばらく上下に漂つていた竜崎の元へ向かいに行

きまた一人で歩き始めた。

彼らは色々と遊びながら最後の場所に行つたが、結局見つけられなかつた。

「チツ、みつからなかつたな。始末してやろうとしたのに

「アンタそのままストレートに言つちやつてるわよ」

「ゲーセンにいるかもしれない。最後だと思つて行つてみよ」

二人は目の前にあつたゲーセンに入つていくが、そこに妹たちはいなかつた。ゲーセン

の中を歩いても見つからず、結局、一人は諦めることにした。

そうすると、藤咲が竜崎の腕を引っ張る。

「何？」

「あれ撮りたい」

藤咲は指さすと、プリクラを撮るためにカーテンの中に入つてい

つた。

「別に撮つてもいいけど、人に見せるなよ。学校でビデオ撮つて

なのか男子に囲まれて、

「わかつたわよ。額縁に飾つて家で保管するわ」

それを聞いて竜崎は夢で見たWANTEDの張り紙を思い出しそ

ツとした。

「とても冗談には聞こえないな、アハハハ……」

竜崎は自分でも顔がひきつり、無理に笑っているのがわかつた。結局一人で並んで撮り、陽が沈みかけていたので、そのまま遊園地をでて別れた。

藤咲はその帰りに数年前のことを思いだしていた。

私は中学の時、友達と電車に乗り隣町に行こうとしていた。電車の中は朝のラッシュ時のような混雑はなく、車両の端から端まで見渡せる。それでもチラホラ立つている人を見かけるぐらいの混み具合で早い話が割と空いている状態である。そんな車両の端の方に私たちはいた。

「この前の映画見た？」

「見た見た！」

「超面白いよね！」

「コ一ちゃんも見たよね？」

私に話をふってきたのは柚子。<sup>ゆず</sup>背が低く、身体つきから全体的にこじんまりとした印象を人に与える。

「かつこよかつたよね。特に最後のシーン」

「そうそう」

私の気に入ったシーンに相槌を打ってきたのは伊代。<sup>いよ</sup>化粧もしないし、黒髪で伝統的な日本人の清楚な印象を与える。

「バイクから飛び降りてトラックに乗り込むところもかつこいいよね

蜜柑<sup>みかん</sup>が別のシーンを提示する。この中で一番派手な印象を与える。

4人でテレビでやっていた映画の話をしていくと、一人のお婆さんがこの車両の反対側

に乗ってきた。そのお婆さんは優先席の近くに立つも急に寝たふりを始めた人達で席を譲つてもらえないようだ。

そんな時に後ろから声をかけ、席を譲る少年がいた。

お婆さんは断つているみたいだけど、私からは顔が見えない少年は次の駅で降りるから

とか言っていた。そこまでであつたら、私は何の印象も残らなかつたはずだ。

案の定少年は次の駅で降り、私達の前を通つて行く。そこでハッキリと彼の顔を見た。

同じクラスの中で唯一、私と仲良くない無愛想な竜崎広界であつた。そして彼は改札の方

へ向かつていたが、そこで私達がいる側の隣の車両に乗つていった。彼は、お婆さんが遠慮しないで譲つた席に座れるように駅で降りる仕草を見せたに違ひなかつた。私はそんな彼に強くひかれた。さりげないやさしさを感じ、それから彼を目で追うようになつた。

しかし、彼は誰とでも仲良くしようとする私を毛嫌いしているようであつた。たまたま

私たちは同じ高校に入学していた。私は何人からも告白をされるが、さりげない気遣いのあのやさしさ以上のものを感じず、上辺だけのような気がしてしまひ断つていた。

今まで、相手に魅力を感じないで、断る立場であつた私が断られる立場になりたくないから

つたから大人しく見ているだけにしよう。

これ以上は嫌われたくないから……

彼はクラスの中で面倒だといつとも、結局は嫌な作業を手伝つたりしていた。面倒な

ことが回つてくるタチらしい。

そういえば、高校に入つてからよく授業中によく眠っているのは  
なんだろう。今度聞  
いてみよう。

第五章～マザーとアザー～

1

竜崎は翌日、バイトに来ていた。

バイトの佳代と店長が話していた。

「懇親会楽しかったですね」

竜崎より年上の女子大生が楽しそうに話していた。

「それいつすか？ おれ呼ばれてないつすよ」

竜崎は仲間外れにされた気分になつた。

「だつて、お前が土曜日は忙しいとか言つてたじやん。しかも、すつごい低いテンションで」

店長がそうこうと、竜崎はそういえばと思つ出す。

「2日前に急にそういう予定を聞かれても、空いてない時もありますよ」

店長は予定を入れるのは急であつたり、やる」とがいい加減であつたどりといふことがよくある。そのおかげもあるのかどうかはわからないが、厳しくなく接しやすい人柄でバイトからも人気がある。

雰囲気は良くても、なぜ人の相談を受ける店がこの店長でうまくいっているのか竜崎は不思議でしょうがない。

「今度は最低でも一週間以上前に言つてくださいよ」

竜崎はそう伝えると、どこにいったのか気になつた。

「ところどころに行つたんですか？」

「近くの遊園地で遊んで楽しんだのよ」

なぜか、女子大生のバイトがニヤニヤしていた。

「そういえば、昨日はお楽しみだつたじやないか」

店長は言葉のフックを放つていた氣でいた。

墓穴を掘つたと氣づいていない竜崎は何を言つてゐるのかわからなかつた。

「あんな美人の彼女なんて連れちゃつて。竜ちゃんも隅に岡けないわね」

佳代がそんなことを言つてきただが、竜崎本人はやはりサッパリであつた。

「彼女？　はて……？」

「遊園地で一緒に遊んでいたあの子彼女じやないの？」

あー、と竜崎は思いつく。

「あれは単なるクラスメートですよ。中学も同じだつたんですよ

「あの子はモテるだろ？」

「はい。だから、早く良い人がみつかるといいですよな。学校で男子から告られて何人

も断つているみたいなんで。ハードルをかなり高目に設定してゐるんじゃないですかね。自分

「それでいつ口説くのよ？」

「早めにしろよ。あのぐらい美人な子なら他の奴にすぐ取られるぞ」

店長と佳代はせかしてきただが、全くその氣のない竜崎には何のことがわからなかつた。

「いや、自分はアイツに好かれてないし、昨日は単に向こうがお礼をしたかつただけみ

たいですから。アツチも自分に気なんてないですよ」

竜崎はそう答えると笑つていてが、店長と佳代は溜め息をついて、額に手を置いていた。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。仕事に戻れ」

そういうと店長は首を横に振りながら裏に戻り、佳代は自分の持ち場に戻つていった。

今日の仕事はあと一件だけであった。

Aさん主婦。それだけしか書いていなかつた。

「それでどういった相談でしようか？」

「夢で人の形をしたヘビみたいな大きな、化け物に子供が襲われて食べられそうになる

夢をみたんです。夢だけで何も起きてないんですけど、ちょっと心配で……」

ふむふむ、と竜崎は簡単にメモをしていき、今日は安心してゆつくり寝てくださいとい

うお馴染み締めの言葉で帰つてもらつた。

竜崎は夢に出てきた怪物について、メモを見ながら店の自分の持ち場を片付けながら考

えていた。

どうやら、夢に出てきたのはラニアのようであつた。

普段、竜崎は神話などに興味はないがRPGに出てくるキャラや敵キャラのモテルぐら

いはある程度、加藤を通じて知つていて。彼が聞いたところによる

と、父が海の世界では

みんな大好きリヴィアアイアサンの次に有名なポセイドン、ゼウスとかいう神の愛人だつたらしい。

「ヘビの下半身に人間の姿のような上半身つて、やっぱり現実じやありえないな

片づけがおわると、店長に挨拶をして帰つていく。

夢で前に店長が拾つた石を自分も拾つたという話をしようとした

が、店長はどこかに電

話をしていて忙しいらしく、竜崎はまた後田に話すこととした。家についていつも通りフォンスの首輪を外し、眠りについた。

2

「おーい起きてよー」

犬が顔を舐めて俺を起きるように促す。俺はいつものように起き上がり移動しようとする。

る。俺たちは妙にリアルな地響きが近くで起きるのでラニアの位置はすぐに知ることがで

き、一緒に移動を始めた。

「今日はいつもより、嫌なにおいだ」

「どんな匂いだ？」

「匂いじゃなくて、臭いって言つた方がいいのかな。とても、言葉じゃ説明できな

い、禍々しいといふか今までの匂いとは雰囲気が違う感じ」

「コンコンと俺はあいづちを打つたが、フォンスの臆病っぷりは知つていてる。

散歩中に犬が来ると吠えられる前にすでに逃げ出そうとする。まさしく『尻尾を向いて

逃げる』の慣用句そのままに長い尾を巻いて逃げ出す。よその犬に立ち向かっていきワソ

ワン吠えあわないから何も言わないが見ていて情けなくなる。そのくせに犬が立ち去ると

後ろから匂いを嗅ぎに行こうとする。

俺はフォンスの臆病さを考え、大した心配ではないと思つ。

「じゃあいきますか」

俺はフォンスを促し、歩きはじめる。フォンスはかなり不安そう

な顔をしているのが人

の俺でも見ていてわかる。」ついでさうと倒して現実に帰るのが一番だ。

しばらく歩くと少女の子供を抱えて、身を隠している親子が目にに入る。巨大なラミアは目が見えないらしく、ところ構わず暴れているのか親子の方には向かっていなかつた。

「さつさとやりますか」

俺はそつづぶやくとラミアの前に立つ。やはりコイツはデカい。ベジの尾を地面にたたきつけ、地震を起こし人々を脅かしているような印象だつた。なぜか歩いてきた俺たちの所へ向かってきたのかを考えると音で察知しているのかといつ推測がなりたつた。

「フォンス。ためしに向こうまで歩いてこい」

俺はそういうとフォンスをラミアの前からと離した。フォンスの足音にラミアは反応す

るが、俺はすかさず剣を取り出し腹の辺りに切りかかつた。

「いつただきー！」

一撃で仕留めるべく、いきおいよく斬りかかる。

だが、固い鱗で覆われているのか弾かれて全く効果がない様子だ。そして、弾かれた俺

の手はビリビリしびれた。

「何で子供を食べようとするんだ」

俺はとありあえず話しかける。

「何で私の邪魔をするの」

「質問を質問で返すな。このボケ」

それを聞くとラミアは手から先が3つに分かれたフォーケみたいなものを取り出し、突き刺してきた。やはり声の音でわかるのか、目が見えない割には正確に刺してくる。

「何で子供を食べようとするんだ」

俺はとありあえず話しかける。

「何で私の邪魔をするの」

「質問を質問で返すな。このボケ」

それを聞くとラミアは手から先が3つに分かれたフォーケみたいのものを取り出し、突き刺してきた。やはり声の音でわかるのか、目が見えない割には正確に刺してくる。

確に体へ向かっている。

だが、距離が遠かつたので俺には届かない。

「危ないだろ。まだ話している途中だろ」

「質問に答えないあなたが悪い」

「先に質問したのはコッチだ！」

「うるさい人ね」

ラミアはそうこうと、尻尾を叩きつけて足の自由を奪つた。  
遠くではゆっくり逃げようとする親子の姿が目に映る。親に庇わかば  
れた子供はラミアを見  
て改めて泣き出しそうになる。

「泣いちゃダメだぞ。音でバレちゃうぞ」

俺がそういうと、母親が子供の口に手をあて立ち去る。

「余計なことはしないでつて言つたわよね」

ラミアはヘビが意外と素早いようすにサッと近づいてきて、ヤリが届く位置までやつてきて一突きしてきたのを俺は後ろに下がりかわす。俺はそんなラミアと距離をとるために忍び足で足音ひとつたてないで後ろへ下がり、ラミアを見上げた。

「それはポセイドンの槍だろ。何でお前が持つてるんだ？」

「お父様のものを娘が持つていて何が悪いの」

初めてまともな会話が成り立った気がした。

今度は槍を持つラミアの両腕に狙いを定め、店長に無理やりやらされた逆バンジーの要

領で高く飛び、右腕に切りかかった。

「ウオオオ！…」

そうするとラミアは右腕だけで槍を振り回し、俺を吹っ飛ばした。

やはり声や音に反応

しているのは間違いない。

そして風が俺の背中を通り抜け、体は段々と下へ降りて行く。俺はそのまま地面に転が

り落ちてしまい、今までに味わったことのない痛みを感じた。体中に擦り傷までできている。

おかしい、今までの夢であってもここまで痛みはない。

「これが神話の怪物クラスの力か」

「これは俺が認めざるをえない事実である。

「怪物、怪物ってさつきから失礼ね。ゼウス様に叱つていただくわよ」

「ゼウスも奥さんに怒られて何もできないんじゃないか」ラミアの顔が露骨に怒りに見て行くのがわかる。

そういうえば、田が見えなくなつた理由を俺は思い出す。

「確かゼウスに目をくり抜かれたばずのに、なぜ様までつけて敬愛するんだ?」

「ゼウス様は良い人よ。あのヘーラとかいう女がいけないのよ」

そういうとラミアは俺が知らない部分まで話し始めた。

しばらく、ラミアは一人で喋り続けた。その話を聞いていると、なんだか夢の世界に来てまで相談屋の仕事しているみたいだ。それにラミアの言ひことが事実であれば、俺たち

人間の感覚だと常軌を逸してるようにしか思えなかつた。

「そうか、ゼウスとの間にできた子供を正妻のヘーラに皆殺しへされ、その上眠れないように呪いをかけられたか」

「そりよ。そして子供を探さなくていいように田をとつてくれたのよ」

さすがに一夫多妻制の世界でそんなことをされたラミアを俺は同情した。

「他人の子供を食べるなんて母親であつたお前も辛かつただろうな。でもな、さすがに

それはやつちやいけないんだぜ」

正直にいうと俺はどう戦えばわからなかつた。

今まで運がよかつたのか、ギリシア神話に出でるよつた怪物クラスを相手にしたことがなかつた。それにこの悲劇的な怪物と化してしまつた彼女をこのまま倒してしまつていいのかわからなかつた。

いいのかわからなかつた。

倒す方法と理由の両方で悩む。

そうするとラミアが口を開いた。

「私が眠ることができれば、かつてに扉の向こうへ帰れる。人の子供が出てくる世界と

は別の世界へ戻れるから子供を食べることもなくなる。そして私がここにいれば子供を食べつくす。そろそろ、現実との扉も開くし」

そこまでいうとラミアは俺に少しのあいだ不気味に微笑んできた。

「さて、あなたは私をどうしてくれるのかしり?」

そういうと、ラミアは眠る気がないよつて尾を地面に叩き震動を起こしてくる。

俺はラミアを眠らし向ひの世界へかえしてやることにした。それにはラミアを眠らせるという難しい作業が伴つが……。

ただ、俺にはその前に一つ気になることがあつた。

「扉ってなんだ?」

「自分で調べなさい」と言つたかったけど、話を聞いてくれたお礼にヒントをあげるわ。オネイロス、ヒュプノスを調べなさい。調べたらきっと、さつき一緒にいた犬が導いてくれるわ。正しき輪を描けばね

「どうも」

俺は礼を言つと、さつき吹つ飛ばされただけでかすり傷だらけになつた体を動かし、眠

らす方法を考える。その間にもラミアは勢いよくヤリをつき、地を揺らし足を巧みに止めてくる。何十回も避けているヤリがとうとう左肩に突き刺さる。やたら現実的だと思つていたが、ここまでの痛みを味わつたことがなく、意識が飛びそうになる。

「チッ。いてーな」

俺はこのままだと夢の世界で殺されそのまま現実の世界でも殺される錯覚を覚えた。

「やる」か「やられるか」の状況で甘いことを言つていた自分が急にバカバカしくなつてくる。コイツは俺の存在を全力で消そうとしている。それならやさしく帰そうとしている自分が滑稽に見えてきた。

俺は覚悟を決めた。

意識を飛ばして眠らせてやる……。そのまま安らかに眠らせて帰つてもらおうと……。

「覚悟を決めたようね。気配でわかるわ。でも遅いわよ」

ラミアはそう言いながら槍で俺を突いてくる。

俺はとっさに横に転がり崩れた地面から石を取り出し、それを別の方向へ投げる。ラミ

アは石が地についた音を聞きそこへ槍をさす。当然、そこには誰もいないから攻撃は外れ、

その間に俺はラミアに突つ込み自分の背の倍以上のジャンプをする。剣を巨大なフライパンに代えて両手で持ち、硬式テニスの要領でラミアのアゴへ下から

ファアハンドの感じで打つ。

ラミアはさすがに顔があがり脳があがり脳が揺れたのかグラつく。そこへ下から振り上げた腕を片

手に持ち替え、初弾で捻じれた体をクルリと一回転させ、腕を勢いよく振り降ろしスマッシュを顔面に打ち込む。

そのままラニアは倒れ込んだ。俺はラニアの顔を除くと、気持ちよさそうに気を失つていた。

「これでしばらく眠れるだろ」

そうラニアに声をかけるとフォンスと親子がやつてきた。

「ありがとうございました」

「礼にはおびませんよ。良かったな君」

俺は母親の陰に隠れていた小さい男に話しかけた。

「この恥ずかしがり屋なんです。駆、向ひでワンナちゃんを遊んできなさい」

そういうと駆と呼ばれた少年はフォンスの方へ走つて行った。

「実はあの子は私の子じゃないんです。でも、これで化け物に襲

われている時に実の子

じゃなくても、とても大切に思えました。本当にありがとうございました」

脈絡もなく急にそんなことを言わなくても俺は困るのだが、大切に思つてくれたことはいい

いことがあるので、余計なことは言わずに頷いた。

駆君に追いかけられているフォンスがこっちに走つてくる。

「コイツ小っちゃい子供とかダメなんです。散歩して寄つてくると逃げ出すべりこむ」

俺はそういうと袋から爆竹を取り出し、同じ轍を踏まないよう立即に爆竹に火をつけ、

夢の世界とおさらばしました。

「いッてエエエ」

竜崎は肩と腕にとてつもない痛みを感じ思わず声をあげた。夢で擦り傷ができ、肩を貫かれた箇所に痛みがある。なぜか、全身にあつた擦り傷のうち左腕だけに痛みを感じる。

彼は夢で起きたことがなぜ現実に影響しているのか理解ができなかつた。そういえば、なぜ逆に夢で起きたことが竜崎の現実に影響しないのかもよくわかつていなかつた。

とりあず、と彼は痛みをこらえ腕に机の中にしまつてあつた包帯を巻く。制服はまだ冬服のために半袖にはならないから学校でもじまかせ、家でも脱がなければわからない。

今朝は右手だけで散歩に行き、朝食をとる時もなるべく左腕を使わないようにした。学

校へ行つても徹底して隠し通すつもりであつた。

学校へ行くと、土曜日に一緒に遊んだ藤咲がいつもと同じような態度であることに竜崎はホッとした。これでお礼もされたし、きっと何もなかつたことになるから他の男子から追いかけられることもない。きっと、土曜日の様子がおかしかつただけだ。

竜崎はそう思い、いつも通り授業で眠ることに決めた。だが、今日は左腕の痛みが時間

を追うことにひどくなり、眠れないし顔が青くなつていぐ。

「おいおい、いつもより体調悪そうだけど大丈夫か

加藤が竜崎へ心配して声をかけた。

「いつも俺は体調が悪そうなのか?」

竜崎がまともな答えを言わなかつたから、いつも通りだなと加藤

は感じた。

昼休みになり龍崎は一人になりたくてどこかへ消えようとして、下駄箱まで行き中を覗くと、一枚の紙を見かけた。そこには大至急といつ言葉と携帯の番号が書いてあった。

とりあえず、電話をかけてみると聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「もしもし、龍崎さん？」

「藤咲の妹か。何の用だ？」

しばらく、話に付き合つたにした、龍崎は黙つて話を聞く。

「それで夜な夜な眠つたまま母親が歩き出すと？」

「はい。そうなんです。お姉ちゃんは気づいてないみたいだし、相談しても不安にさせ

るだけなので龍崎さんに相談しようかと思つたんです」

「んー、とりあえず、お母さんに聞いてみないとわからないな」

竜崎は思案する顔になると、びっくり呼び出すのか、又はびりやつて店にきてもらうのか

を考え始めた。その様子を感じたのか花桜梨は「なん」と言つ始めた。

「ウチの家にくればいいんですよ」

彼女は姉妹の立ち位置をわかつていないらしく。そんなことをして学校の誰かに目撃されたら自分の存在が消されてしまう、と龍崎は思つそのまま口にした。

「それなら、心配しなくていいですよ。変装してくれればいいんです。じゃあ変装グッズを用意しますから。後で置き場所をを教えますから

なぜ、変装道具を花桜梨が用意するのか龍崎にはわからなかつたが、利用できるものなら利用しようと思った。

「それでいつがいいんだ？」

「なるべく早くがいいです。今日はダメですか？」

「ちょっと寄るところがあるから、それからでいいのなら」

「じゃあ今日で。それから土曜日はお姉ちゃんと楽しめましたか？」

竜崎は「なぜお前がそれを知ってる」と眼鏡に手をさしになるのをじらえた。

「ん？ どうこうこと？」

「お姉ちゃんが人と会つのにオシャレしてたので珍しいなって思つて。普段は人と会つても最低限の恰好しかしないんです。それで竜崎さんと会つのかなつて。家で誰と撮つたのかわからないプリクラ見てはしゃいでたし」

アイツはそんなに土曜日はおかしかったのかと竜崎は思い心配になつた。逆に妹と一緒にいた男のことを聞き返してやりたくなるが墓穴を掘るのが田に見えてわかるので竜崎は聞くのをやめた。

とりあえず、予定だけをたてて電話をきつた。

学校が終わり、俺は店長に聞きたいことがあつたからバイト先へ急いだ。店の正面は開いていないので従業員用の入り口からはこると、店長の柳林が寝ていた。

「おひ、どうした？ 今日は休みのはずだぞ」

「店長、ちょっとおかしいんですね」

俺はケガの「」とや門の「」と、それにラミニアが言つていたことを話した。

「まさか、最初に僕と会つた時に拾つた石をまた拾つてないだろうな？」

店長はいつになく真剣な目をして聞いてきた。

「えっと、透明な石ですよね？ それならひとつほど拾いました」  
柳林はそれを聞くと深くため息をつき、俺からどういう時に拾つたのかを聞くと、事の

重大さを説明してきた。

「えっと、何から話せばいいのやら。まず、夢と現実について話そうか。夢と現実の世界をつなぐのはなんだ？」

「つなぐというか、夢を見るときは眠つてないとみれませんよね？」

俺は自分が関わっている夢の方だと思い回答をした。

「そうだが、それは1つの側面でしかない。もともと人の夢には2つある。1つ目は将来コリになりたいとか何かをしたいという欲求だな。竜崎にも何かあるかい？」

「世界平和と皆が笑顔で暮らす世界にしたい」

「お前は本当に高校生か？ 出家から帰ってきた人みたいだぞ」「そう答えとけば、教師にもタメにも万能なんです。深くは突つ込まれないし、タメには笑いすら取れる」

「そうか。まあいいや」

そういうと店長はお茶を一口飲んだ。

俺にはお茶どころか椅子すら用意してくれない。

「子供の頃にスポーツ選手に憧れて夢を見るのはそれだ。これが起きいていても見られる

現実の夢。そしてもう1つが俺たちに影響をしている方だ」

「それが寝ているときに見る夢ですか」

「そうだけど、実はシンプルにはいかないんだ。こうしたい、こうなりたいっていう欲

求がたまると寝ている時に夢を見る。深層心理という話をきいたこ

とはあるか?」

「占いが好きなと女子と少しだけその話をしました」

「それに近い。例えば、Aさんの夢がある人から逃げている夢であつた時、その人から心理的に鎖のようなもので縛られて逃げられない状態であることが多い。その鎖を僕らが

断ち切る」

「それは普段やつてることですね」

「そうだよ。それが2つ田の夢。これにまもつじし、深い話があるんだ。ラミアが言つ

ていた2つの名前と扉。これが話に出でるのはこれからなんだ」

やつと気になつていた話題になり相づけをつつ。

「コンコン」

「君はまさか、あいづちを打つを音で表現したわけじゃないよね

?」

「はい?」

最近使い始めて誰もわからなかつたのになぜ、この店長はすぐわかつたのか不思議で  
しうがなかつた。ネタがわかるまでは、誰もわからないだらつと  
少し自慢げに使つてい  
たが、急に恥ずかしくなつてきた。

「あいづちを相槌つて漢字で書いて、槌といつのは建築工具で簡単  
にいうと木製のハン  
マーだろ。それを打つとコンコンとなるんだ。君は真面目な話を  
している時にまつたく  
店長はそういうとわつせよつも深くため息をついてしまつた。

「それより、本題に入りましょ」

俺はこれ以上痛いことにならなつよつに話をそらす。

「長々と話をしようとしたけど、やめた。またコンコンとか狐み  
たいなことを言われた

ら反応に困るからね。カバンについているそのキツネのストラップでも使って、もう一回言つのかい？

もう何もかもバレて「何でわかつたんですか」と聞く気になれなかつた。

「君の拾つた石はおそらく、オネイロスの3つの神石だ。オネイロスは、モルペウス、パンタソス、ポベトル別の名をイケロスという3つの神の総称だ。モルペウスは人の形や声色を真似る。パンタソスは木や石などの無生物を真似ねる。イケロスは獣や鳥を真似る。

これはヒュノップスつていう眠りの神の封印石にもなつてゐるんだ」店長の話をそこまで聞いたが、俺にはまだよくわからなかつた。

「それと今まで無関係であつた、俺が夢でケガして現実に影響したと関係あるんですか？」

「そこだよ。本題になるのはね。このヒュノップスは奥深い洞窟の先に眠つてゐるんだけど、3つの封印石がなくなると棺が開き目覚めてしまう。おそらくこれから夢遊病の人

が大量に出てくるだろう」

「そういえば、今日はこれから夢遊病の人に話を聞く機会が持てそなんです」

「それはちよび良かつた。これを首輪につけなさい。棺のある洞窟へいけるから」

そういうと金庫から犬の首輪を取り出し、俺に渡してきた。

「店長も洞窟に行きましょうよ」

「僕はもうたぶん無理だよ。いい年こいた大人になつちやつて想像力が衰えてるからね。

それに石は君が関係している夢に出てゐるだろう。自分で解決しな

いとね

この店長、都合のいいことと書いて逃げる気満々であるのがハッキリとわかった。

「それと最後に扉とはどういった関係が？」

「それはね、ヒュノップスが扉を開ける儀式をしているからだと思うよ。その扉はハッキリってあけをせるとまよい事になる。君が戦つた以上の怪物がこの世界に出てくる。夢

遊病の人を使って扉を開けさせ、そのまま現実と夢の世界へのゲートをつくり、夢と現実がハッキリしない世界にしてしまつ。何でもアリの世界になつて、めちゃくちゃになる」

とは間違いない

俺はその話を聞いて何かの冗談かと思つたが、ケガのことを考えると冗談には聞こえなかつた。それにこの店長は茶化すときとハッキリしない場合の区別はついている。

「ハリマの地震が妙にリアルに感じたのはそのせいだつたんですね？」

「おそらく、やうだらつ。現実と夢が近くなつてしまつてこるんだろう。だから、早めに手を打たないと大変なことになるよ」

店長の話を聞くと、携帯が鳴つた。

「もしもし。わかつた、今から行く」

「ま、気を付けていらっしゃい。傷はそつちの世界で治してきなよ。治療しないでこつちに来るとまた痛むから。昨日よりも痛み場所は増えるはずだから」

話が終わつた店長からすぐに効くらじい痛み止めをもらひ、俺は店を後にする。

## 夢と現実の狭間でもがく少年

第五章～夢と現実の狭間でもがく少年～

1

普通の家と何も変わらない家の前で遊園地にいるような着ぐるみを着ている少年がいた。

これを着るぐらいならそのまま来ても良かつたと思うが、その衣装が入っていた袋にはメ

モ用紙みたいなもんもセットで置かれていた。それには『これを着てください。これで変装も

バツチリですね。せっかく用意したので着てこなかつたら不審者で警察に通報します』と

書かれていた。彼は仕方なく、行き先の民家の隣にある近くの公園のトイレで着替え、家のインスターフォンを鳴らした。

「竜崎です。花桜梨さんいらっしゃいますか？」

カメラがついているので、中では笑い声が聞こえてくる。

「いませんよー。サヨウナラ」

そう言われるとブチッと切られてしまった。

家の前に立つ彼は携帯を片手にもう一度鳴らした。鳴らしながら携帯をかけると、イン

ターフォンの向こうと同じ声が聞こえる。

「おーい、どうこいつことだい？ 人にこんな恰好をさせと、あからさまな居留守を使つ

とは？」

彼はあまりの仕打ちに眉間にしわを寄せていた。

「すみません。今でたのは母なんです」

そういうと、中から一個下の少女が出てきて招きいれた。後ろでは少女の母親らしき、

白人の背の高い女性が立っていた。まだ彼の方を見て腹を抱えて笑つていて。

「こんにちわ。花桜梨さんの知人の龍崎広界といいます。今日はお話を聞きたくてお伺いしました」

「はい、話は聞いています。中へどうぞ」

「失礼します」

そういうと彼は中に入り、リビングへ案内され、藤咲家のお母さんが笑いをこらえるよ

うに台所へ行つたのを確認してから花桜梨に話しかけた。

「これはヒドすぎないか?」

脱いだコレを指さし龍崎は彼女へ話しかける。

「だって、普通の服じゃ面白くないんだもん」

「だからって、カバが逆立ちしている着ぐるはないだろ。さすがにさ」

「手元にあるのがそれしかなくて。バカみたいで面白いじゃないですか」

「そもそも何でこんな着ぐるみ持つてんだよ」

彼はそういうと、藤咲の母親が紅茶とクッキーを持つてぐるのが見えたので話をやめ、

わつそく本題へ入ろうと話を進めた。

「では、わつそくですか?」

「その前に聞きたいことがあります」

「なんでしょうか?」

龍崎は淹れてくれた紅茶に口をつけ、質問を促した。

「娘の花桜梨とはどこまでいつてるんですか?」

「ちょっとお母さん何聞いてんの!?」

龍崎の隣で聞いていた、花桜梨が紅茶を吹きこながらそう答えた。

「いつてるといつのはどうこいつでしょつか？」

「食事に行つたりであつたり、手をつないだりとかです。それ以上のことであつたら、

この場であなたは死にます」

「それ以上もなにも一回呼び出されたフアミレスで話をしたり、後はバイト先にきたの

で少し話しただけでそれだけですよ」

語尾はきつと言葉を間違えたんだろつと、考えた龍崎は丁寧にそう答えると紅茶をテー

ブルに戻し、クッキーに手をつけた。

「そうだよお母さん。龍崎さんはお姉ちゃんと同じクラスでそれもあつて、お姉ちゃん

と一緒に一度だけ会つただけなんだよ」

「そうなんですか。てっきり勘違いしてしまいました。では、そのクッキーは絶対に食べてはいけませんよ」

そういうと、藤咲の母は龍崎の手からクッキーを取り上げ、台所へ新しいクッキーを取

りにいった。龍崎はその様子を不思議な目で見ていた。

「やつときは毒いりクッキーを食べさせようとしたみませんでした」

龍崎はその声が聞こえた先の隣の花桜梨の顔をみると、額に手をあて溜め息をついてい

る。龍崎は顔を引きつらせ青くなる顔で戻つてくる藤咲の母親へ視線を戻し、田が合つと苦笑いをするしかなかつた。

龍崎は母親が座ると本題に入る。

「それで夢を見て歩き回つている感覚みたいのはありましたか？」

「いいえ、ないんです。白い羽が一枚舞つていた以外、夢のことは何も覚えてなくて」

本当に思いだせないらしく、それ以降は夢の話から遠ざかつてい

き、藤咲姉妹の思い出

話になつていつた。竜崎は人が夢を見ても思いだせないことが多々あり、仕方がないこと

をわかつていてるのでお母さんの話に付き合つていた。

「竜崎君は聞き上手ね、つい話しちゃうわ」

「ありがとうございます。バイトとはいえ、今の仕事で必要なので上手になるしかないですか？」

「ただいまー。誰か来てるの？」

ドアが開き、聞き覚えのある声が竜崎の耳に入つてきた。竜崎は本能的に窓から逃げよう

うと立ちあがると、先に声をかけられてしまった。

「アンタ、何でここにいるのよ！」

竜崎の顔を見るなり顔が赤くなつた誇紫が聞いてきた。

「やあ。またお前の妹に依頼されちまつた」

竜崎はそう答えるのがいっぱいにいっぱいで恐ろしさのあまり、母親の顔が見られなかつ

た。竜崎は実際に何もしていないのだが、なぜか身の危険を感じていた。

「アンタ、学校でも顔が青かつたけど大丈夫なの？」

「おかしいなー。さつきまで青くなつたのにな」

竜崎は「今、青いのはお前の親のせいだ」と言つやうになつたが、それをいつとおそり

くこの家から生きて出られなくなるのは確実であった。

「竜崎さん、体調悪かったんですねか？」

「いや、いつも通りだ」

竜崎は花桜梨に一言かえし、誇紫に顔を向かえた。

「それより顔赤いぞ。熱もあるのか？ 土曜日も様子がおかしかつたし」

「大丈夫よ。土曜日も別におかしくはなかつたわよ。早く帰りなさいよ」

そういうと誇紫は怒りながら一階へ上がり一階へ上がって行つた。

「ふーん。やつぱりお姉ちゃんと会つてたんだー」

花桜梨は竜崎をジーっと見つめた。

「いや、この前のお礼をしたいって言われたから付きあつただけだ」

「お礼で娘と突き合つた！？」

なぜか、母親顔を真つ赤にしていたが、藤咲妹同様どこかおかしいのか、日本語に難があるらしく、竜崎はやんわりと違んですよ、とこいつことを示さなければますます立場が悪くなるのがわかつていた。

「この前妹がお世話になりましたって感じで、わざわざ遊園地のチケットをくれたんだ。

俺のことが嫌いなのにわざわざ一日使つたんだぞ。誇紫に感謝しろよ

それを聞くと花桜梨はタメ息をつき、首を振つていた。

「帰れって言われたのでおとなしく帰りますね。それじゃあ、今日はゆっくり休んでくださいね」

そういうとカバンを持つて帰ろうとする竜崎をお母さんと花桜梨が玄関まで送りに來た。

「これ、最後の一冊だから食べて行きなさい

あからさまにポケットから出したやつだったので、竜崎は腹いっぱいですと断り家を後にしてしまった。

「あれ、竜崎は？」

部屋着とは思えない服を着て階段を降りてくる誇紫を見て花桜梨は呆れてしまった。

「お姉ちゃんも素直じゃないね」

「やっぱりあの子のために最初に盛つとくべきだったわね」

「最初のクッキーで仕留めちゃうと、話がわからなかつたわよ」

「何の話をしてるの？」

「こっちの話！」

花桜梨はそういふと、母親と一緒にゴーラップ話し始めた。

かつてに立たされた死の門の前から生還した竜崎は犬の散歩に行き、腕の感覚を確かめ薬が効いていることを実感した。そして夜がふけ、布団に入る前へフォンスの首輪をつけかえ、今まで店長につきあわされたことを思いだしていた。そのうちに彼は深い眠りについた。

2

俺はいつになく眠い目をこすり、起きるとそこは辺りが真っ暗であつた。ここが話に出てきた奥深い洞窟なのだろうか。いつもこの世界では一緒にいる動物の気配がなく、さすがに逃げ出したのだろうか。俺にも危険な香りが漂つてくるほどだから犬であるアイツが怯えないわけがない。

なんとか明かりをつけようとまつあきを召喚する。片手にまつあきを装着し、直感的にただならぬ気配がする方へ歩いて行く。中に進むに連れて圧迫感が増し、俺は息苦しさを感じた。RPGのダンジョンみたいに入り組んで複雑にはなつてい

ないのが救いだ。

「あ、宝箱ゲット」

俺は道に落ちていた箱を開けた。

中から破裂音と共に黒煙が上がる。

箱の横の水たまりには黒くなっている顔が映った。

それを見て無言で顔を拭き先へ急ぐ。

ヒューパノスという眠りの神はどういう姿なのだろうか。棺に封印されていたぐらいだか

らまともな神ではないのだろうと察しつぶ。

「まだ着かないのかよ」

俺は歩きながらボヤくと遠くから女の叫び声が聞こえてくる。誰かがこの先に行つてい

るらしい。少しずつを上げると洞窟の先にある光に満ちた古代神殿のような場所にたどり着く。そこは金銀の財宝ではなく、代わりに白い石膏の像がいくつか飾つてあるだけであ

つた。

「またせたな！」

俺はすぐについたフォンスへかっこつけ声をかけた。

「お疲れ様でした」

その場にいたもう一人を見かけて俺は立ち去ろうとする。

「それ、この前みたわよ」

「何でよりによつてお前がいるんだよ」

「知らないわよ

「どういうことだ、フォンス」

「わからないよ。広界の匂いがしたから来てみたらこの子が居たんだよ」

「何でコイツから俺の匂いがするんだ？」

「私はそんな匂いしません！」

「特に右ポケットから匂いがするんだよ」

そう言われ藤咲はポケットに手を入れるとどこかで見たハンカチを取り出した。

「それ俺のハンカチだ」

「その……ありがとう」

そういうと横を向きながら俺に返してきた。

「横を見ながら返すってなんなんだよ。目を見て返せよ」

俺が言うと藤咲は顔が真っ赤になり、小声で返してきた。

「子供じゃないんだから注意されたぐらいで顔を真っ赤にして怒るなよ」

「ちがうもん」

藤咲はやはり怒っているようだ。

「そこでラブコメやらないでくれないかな」

「誰だアンタは」

俺は直球で聞いた。

「口は俺の洞窟。わかる？ 早い話が俺の住処」

「じゃあ、アンタがヒュノブスか？」

そういうと全身を見たが少し背が高いだけの男にしか見えなかつた。ある一点を覗いて。

「そうだ」

そういうと彼は背中に生えた羽を一回はばたかせた。羽が生えているのがいかにも神話の世界のような感じである。

「しっかり黒いパンツは履いてるんだな」

「そりや全裸で出る前にはいかないだろ」

そういうと、右頬が赤いのを赤くなつてるのが目に入った。

「この女に全裸が理由でひっぱ叩かれただろ？」

「なぜわかる」

「俺には全てがわかる。アンタが何をやつとしているのかもね」

俺はそういうと棺に手をやるとやはり蓋が開いている。

「ザッキー嘘ついてる」

「なぜわかる」

「嘘ついてると後ろ髪をイジる癖があるもん」

「そうかい」

「え？ ずっと気づいてなかつたの？ わかつてやつてるんだ  
と思つてたよ」

フォンスが間に口をはさむ。

「うるせー。尻尾をギュッと掴んで逆さ吊りにするだ

「それだけはやめてよ！」

フォンスは首を振つて嫌がつてゐる。もともとやるきなんて全く  
なかつたんだけどね。

「それは本氣でいつてるじゃない。髪触つてないし

藤咲が余計な事を言つてくれる。

俺は面倒なので聞き流し、ヒュノブスと対峙した。

「お前がラミアを扉の向こうで戻したとこう人間か？」

「そうだ」

「そうか。貴様には永遠の眠りをくれてやろう。この女の様に  
指さされた方向を見ると藤咲のおばんさんが田に入る。

「ママ！」

藤咲は叫んで近寄るが俺は手で道を阻む。

「待て。俺がすべて終わらせてやるからこのまつあきを持つてる  
んだ」

俺はそうこうと一步前へまつあきを藤咲に渡し剣を空間から出す。

「これ、たいまつだよね？ まつあきて何？ 漢字で書いたの  
がよめなかつたの？」

「ちよつと松明に名前を付けてみたかっただけだ。ちなみにこの  
ゴムみたいな輪にも名

前がある。フォンスちょっととこ」

「はーい」

俺はフォンスを呼び、足に腕輪を付ける。

「これは巨大化の輪だ。体の大きさはフォンスの意志で決められ

る。合図するまでここ

で待つんだぞ。コイツが藤咲が前に行きそつになつたら躊躇んでいいから止めろよ

「わかつたよ

フォンスはそういうと藤咲の隣にしつかり座つている。それを確認してからさらに一步

前へ出る。

「さて始めますか

「その前に聞きたい。お前はなぜ私の所へ来た

ヒューノプスは問い合わせてきた。

「何でかな。身近で人が傷つくるのも見たくないからかな。一步の勇気と親切さで人生が変わることもあるし

そういうと、数年前の出来事を思い出す。あれがすべての始まりであった。

「どうか。じゃあ私を倒さなければ、夢が現実に影響を与えることも知つていいのだな？」

ヒューノプスは俺が知つていることを前提に聞いてきたのである。 「人の強い想いが夢になる。それが現実の世界に繋がつて世界的な発見に繋がつたりす

るんだ。良い方であれば何もしないが、悪い方であれば干渉させてもらう。人が面倒なこ

とになつてその面倒なことが俺の所に面倒な形で回つて面倒なことに巻き込まれるのは嫌

なんでね

そこまでいうと俺はヒューノプスの目をジッと見据える。ハッキリ言つて怖くて目を合わ

せたくはなかつたが、自分が止めないといけないのをわかつていてた。

「どうか。そこまでいうのなら何も言つま」

「逆に聞きたい。もう一度おとなしく眠る気はないか？」

「私を満足させたら歸つてやる。封印石もお前がすべて持つて  
いるようだしな」

「3つのうち2つしかないぞ」

「充分だ。石は2つでも問題ない。そこのある台座のくぼみに石  
をハメれば自動的に私  
は眠りつく」

「そうか」

そういうとしばらくお互い構えあつたまま動かない。正確にいう  
と俺の方は動けなかつ

た。ヒュノブスが手のひらを俺に向けると翼を動かす。

俺は手をかざしてきた理由を少し考える。どんなことをしてくる  
のか予想が付かない。

この数秒の間にヒュノブスは、このぽつかりとした空間で翼を動  
かすと突風が吹き荒れ、  
俺達を吹き飛ばしにかかつてきた。

その凄まじい突風を地面に剣を刺して堪えると相手を見据え、や  
つが涼しい顔をしてや  
がるのを確認し舌打ちをする。

「フォンス、キヤツチは？」

「してるよ。この人も無事だよ」

口で加えられた藤咲を見て安心する。

「そのまま背中に乗せろ。後はわかるな？」

「逃げるんでしょう？」

「そうだ。わかつてゐじやないか。名犬」

「ちよつと、お母さんは？」

「大丈夫。広界がうまくやるよ」

「そうだ。俺がうまくやるからひとつとと早く逃げる。やこに居て  
も邪魔になるだけだ」

「ふん。一人はさすがに助けられないとみて、若いほうだけここ  
から逃がそうとこつこ

とか。賢い判断だ

「誰が賢いだつて？　お前の言つことが賢いのなら俺が考えていることは賢くはない」

「わようか。できないことは言つべきでないぞ。女の前では特にな」

「ほつとけ」

俺は言い終わるか終えないかのタイミングで切りかかる。フイをついて風の速さで斬りかかるが、避けられ翼にキズをつけるだけで精一杯でまともに体にヒットさせるのは骨が折れそうである。

「じざかしー」

「神話に出てくるクラスの怪物相手に卑怯もクソあるか」

「君はサバイバル気分で秘境ピクニックに行くのかい？　ま、自分之力を過信しないのは褒めてやる」

「ここに来る以上のサバイバル気分を味わえることなんてあるのかい？」

俺は話しながら絶対にヒキョウを間違えていると思いながら隙を探る。ヒュノプスは単に腕を組み立っているだけなのだが、威圧感で前に進みにくいつきみたいてフイを

ついて攻撃することはもう難しいだろう。

攻撃に移ろうとしたのか、少し腕が下がったのを俺は見逃さず突つ込む。風に背中から

吹き飛ばされる要領でブリッジのような小さい弧を描き、ヒュノプスの頭上の辺りから水平に斬り首を狩りに行く。だが、首狩り族のよつて上手くいくわけもなく、サッと前へ瞬

間的に移動したヒュノプスに腹への強烈な一撃を許してしまつ。俺の腹は九の字にまがり、

吹き飛びかけた。攻撃したはずのヒュノプスの手が赤い液体が流れる。

「ふう。腹に鉄板を入れてなかつたら危なかつた」

「鉄板を殴つて血が流れるわけなかろう。トゲなぞ仕込みおつて。卑怯だぞ」

ヒュノプスは血を舌で舐めながら睨みつけてきた。

「いや、俺側にしてみたら鉄板だぜ」

俺はそういうと、腹側は鉄板になつてているものを見せた。

「盆栽に使うハリ山の剣山が仕込んであんじやねえか」

ヒュノプスは指を指し、なぜか怒っている。

「自分の実力はわかつてゐるもんでね。できる」と「できない」との区別は付けてゐるつも

りだし、実力以上の面倒なことを押し付けられても困るんですね

俺はそういうと、すつと後ろに下がり距離とる。

「貴様には苦しみを『えてやろつ』

ヒュノプスは翼で地に立つたまま羽ばたくと無数の羽が飛んでくる。俺はそれを右手の

中指と親指を擦りパチッと音を鳴らすと炎を出し、すべてを燃やした。

「アチツ！」

今までなら熱さを感じることがなかつたが、夢と現実が近いせいかリアルに痛覚へもろ

に響く。一瞬ではあるが隙を見せるとヒュノプスは突進してくる。俺はとつさに人指し指

の爪を親指ではじき、その指の先に電気の短剣みたいのをおこすと、マッヂョな天使は突

き刺されると思ったのか突進をやめた。幸い電気は発生すると指からすぐに離れたので感

電はしない。

「芸が細かいな。ただ、いつまで持つかな？」

「誰がゲイじゃ。俺は女の方がいいわ」

俺は自分がゲイだと言われたのだと思い否定し藤咲を見ると額に手をあて溜め息をついている。

「あんたボケてんじゃないの」

そう言われ、俺はヒュノブスへの視線を戻すと奴は声をかけていた藤咲の方を見ている。

隙を予定通り作れたので、再びおれは風にのり斬りかかる。今度は確実にとらえた。

斬りつけられてもとっさに反撃していくヒュノブスの攻撃をかわし後ろに下がる。

「この私の顔に傷をつけるとわな。ひとすじとはいえ見事だ。だが、貴様はこれだけ以上は私に当てることができない」

ヒュノブスはそういうと、一直線に傷がはいつた頬から出る血を手の甲で拭うと舌で舐め始める。そして手に杖を生み出し地面に突き刺すと、杖の先の觸<sup>と</sup>く<sup>る</sup>體から火が出てくる。

それを俺は横にロールをして避けた先にヒュノブスが待っている。俺は勢いよく足で腹を踏みつけられ、そのあと首に足を乗せられてしまい身動きが取れなくなる。

「こうかい。やつといったよ~」

「よくやつた」

辛うじて視野に入るだけの位置にいるフォンス達に目をやる。

俺はフォンスの口元に藤咲のおばさんを確認すると、持っていた剣で注意が散漫し始め

ているであろうヒュノブスの足元を刈ると足首に一つもつ一筋の傷ができた。その瞬間に体と首をねじり俺は逃げる。

ヒュノプスは怒りで興奮し始めたのか、杖を上に掲げ雷を落としてくる。避けたはずなのに雷が直撃した俺は感電死することはなかつたもの少しアゴの辺りが痺れ、剣や鉄板を空間にしまう。避雷針になることをさけるためだ。

それを確認するとヒュノプスは腹に強烈な一撃をお見舞いしていく。体がくの字に曲がり5mは吹つ飛びと全身に擦り傷ができみぞおちに入つたパンチが痛む。殴られる瞬間に息を吐きクリーンヒットはしなかつたが、人を覆つている表面の皮が痛い。

「ザツキー！」

俺はそう呼ばれ立ち上がる。

今度は俺の番とばかりに京都のお土産屋で見かけた木刀をだし殴りかかる。俺は杖を少し上に持ち上げ火をだそとするのを確認してから手元から穴あきの家庭用のガスボンベを出す。そのままガスボンベに引火してドカーンだ、ヒシナリオを頭に描いていたが、残念ながら夢と現実が近すぎて痛覚がするじすぎるのできないことに気が付く。

痛覚がするどくなくともヤバイ氣はするが……。  
それならこれで対応すればいいと、考える。

「燃えてるかなー？」

俺はガスボンベを手元から少し離し、中で火から逃れられる空間を持つた巨大な鍋を出し隠れる。鍋はやはり火を通すから中はそこそこ熱かつた。外を眺めると体中が焦げたような人が立つていた。髪がモジヤモジヤになり、口を開けるとから煙を出すとこつちを睨みつけてくる。瞳の奥にドス黒いオ

一  
ラを感じる。

「何デ生キテルンデスカ?」

俺は少し声を震わせながら言つ。

一ぐそボケがああああああああああああ

國立文庫

鍋ごと蹴り飛ばした。

俺は壁まで吹き飛ば

でいるのを見たのは壁から抜け出した後である。早くケリをつけないといけないが台座にすらたどり着けてない。

『走り飛はした本人のビニ ハンスがぬぐくこと王者はなつた様な歩みをしてくる。俺は』  
矢をサツとだし、店長にやらされたアーチェリーの要領で打ちこむ。  
奴は体をねじり歩み  
を止めずに歩いてくる。

4本。4本でダメなら  
諦める」

俺はそう言いつながら10本近くの矢を放つ。目が慣れてきたのか、段々とギリギリで避けるようになってくる。

おふはせへと本打一と遅く手は手で矢を振む

魏其嘆曰「吾令人望其氣皆爲龍成五采此皆天子之氣也」

「今度はヒットしたぜ」

俺は「ハハ」と顔を殴った拳を見一めや」と笑みをぐぐ

ビニーバスは妙にして、不敵な笑みを一ぐる。俺はすぐには殴り返されただが、前ほどは

痛くはない。

「やつと効いてきたようだ。お前ゾウでも10秒程で倒れる毒をくらつてゐるのに平氣な顔をしてやがったんだよ。顔の傷とかから入つてゐるはずのに」

そう、俺はまともに相手をして勝てないから毒を盛つていた。剣山に剣に、これでも効かなかつたら直接口に入れてやるつもりだった。

ヒュノプスからの反応がない。やつと意識が朦朧しているのだろうか。フラフラと歩き

回つてゐる。そこへ俺は銃の槍を取り出し腹へ突き刺す。そのまま俺は追撃を辞めこのチ

ヤンスを見逃すまいと、台座に向かい封印石の窪みに1つハメた。

そうすると地面がガタガタと音をならし泣いてゐるようであつた。

ヒュノプス腹に槍が

刺さつたまま、まるでさまい歩いてゐるかのような歩み変わつた。2個目をハメる搖れ

が大きくなり、ヒュノプスが少しづつ槍に帰つて行く。

ヒュノプスの手にある杖に田をやるとドクロが何かをつぶやいているようである。それ

を見つめていると俺の足元が崩れ始める。

「ザシキー！！」

「広界！！」

俺は一人と一匹の悲鳴を聞きながら崩れしていく岩をゲームの要領でポンポン跳ねて行く。

「早くここから出る」

上に這い上るとそういう。

一人と一匹がまた何か叫び声をあげてゐる。さつきより崩れる音が大きくなり何を言つてゐるのか聞こえない。

俺は何を言つてゐるのかわからないため近づいて行く。そこで俺

はヒュノプスに朦朧とする中で放り投げられた杖が背中を貫く。

「ザッキー！！！」

私はそう叫ぶのが精いっぱいだった。ザッキーの背中から禍々しい不気味な杖の先が見える。周りは真っ赤になつていいく。拙い言葉でしか表せないぐらいの状況になつていいくのがわかる。

「フォンス君。ママは私がこの袋に入れるからザッキーを助けてあげて！」

「わかつたよ。はい」

そういうとフォンス君は首を舌から上へ振り上げママを上に放り投げると私の手元に収まる。私はそのまま首の所にある袋に入れる。

「急いで」

私はそう急かすと揺れる背中を両手で必死につかむ。ザッキーを口にくわえてフォンス君は洞窟から脱出をしようとする。

行きとは違ひ、崩れかけているから新しく道ができる。

「血で鼻が利かないから広界を持つて」

そういうとフォンス君は一回止まり、私を降ろす。私はすぐにザッキーを乗せる。

「ザッキー！ ザッキー！ 死んじゃ嫌だよ。ザッキー！」

私はそういうと頬へ涙が滴る、ポロポロと流れて行く。

「ザッキー！」

私は言葉を発すると体が段々と薄くなつていいく。それはまるで体が暖かくなる感じ。フ

ワフワとしたと思つと急に重くなる。これから先を思つと気が重くなるほどに……

竜崎は目を覚ますと全身の痛みで声をあげそつこなるのを必死で  
こらえた。竜崎は左腕  
に管が刺さっているのを確認し、状況をつらつらと把握する。  
ここは病院なのがと。

俺は付けられた呼吸器をかつてに外し少し思い出す。  
なぜ、ここにいるのか。

藤咲とフォンスの叫び声がし、背中から杖が胸を貫いたのは夢の  
話であるはずだ。夢と

現実の世界が近くなつても、ヒュノップスを封印すれば済む問題であ  
るはずだ。それに最後  
が思い出せない。

結局どうなつたのかもわからない。どうなつているんだ。  
それに少し腹が痛む。俺は腹を触るとガーゼの上に包帯が巻いて  
ある。

意味がわからぬ。

俺は何も言うわけにもいかないが、とりあえず、目が覚めたから  
ナースコールを押す。

看護師さんがやつてくると俺は状況を聞いた。

母さんが夕方まできていたこと。

若い女の子が見舞いにきたこと。

そして自分が3日間眠り続けていたこと。

どうやら腹の包帯は寝たまま外へ歩いて行き、近くの廃墟の鉄骨  
に転んだ事になつてい  
るらしい。

聞いたときは思わず、嘘付けと反射的に言ひそつこなつたが、そ

うにうことにしておい

た方が都合が良さそうに見えたからあわてて口をつぐむ。

実際に夢遊病の患者が近隣でなぜか大量に発生し、その廃墟に集まつていたらしから  
辻褄は合つ。

「妹さんきれいですね」

看護師さんがいう若い女の子は妹だったのか。カトケンといい、  
何で素直にそう言わな

いのか、俺にはわからない。世の中わからないことだらけだ。

そこでノックの音がする。

「ちょっと待ってください。きれいな人がきたんじゃないですか

か」

「あ、そうですか」

「彼女ですか？」

「妹と付きあつたら犯罪でしょ」

俺はそういうと笑いながら看護師さんが出て行くのを待つ。

看護師がドアを開け出て行く。そこにはウチの高校の制服姿の女  
が立っていた。

「何で来てるの」

相手の顔を見ないで素つ気なく答えた。

「妹から全部聞いたわよ」

そういうとベッドに近づいてくる。

あのボケ余計な事をいいやがつて、と思つたがさすがに言つわけ  
にもいかない。

「何で言つてくれないのよ」

「何を？」

カマをかけられたら困るから最新の注意を払う。元々カマをかけ  
られることには充分に

注意深くしているので新しく警戒線を張る。

「何あんな危ない真似をするのよ。バイトのことも聞いたわよ

あーあ、全部話してやがる。俺はわざと顎に手をやつ溜めの息をつべとベッドの側に来て

た藤咲に田をやる。やはり怒つているらしく。

「俺に助けられてそんなに不快かい?」

「そりぢやないわよ」

「黙つてて悪かったと言いたいといふだけ、何も言つ必要はないだろ。妹のときだつて、忘れさせて夢で何もなかつた感じにするつもつだつたんだから

「やうこいつことじやないわよ」

なぜか藤咲は甲高い声で泣き声になつている。

「面倒だつて言いつつ、結局はいつも学校の時みたいに全部背負いこむのはやめてつていつてゐるのよ」

語尾が強くなつてゐる。普段は怒らない藤咲だが、これで怒られたのは2回目である。

「面倒なことが逃げてもかつてこないからやつてくるんだよ。

それに何でお前に言わ

れなきやいけないんだよ」

俺がそういうと、とつとつ泣き始めた。今回だけは前みたいに折れる気がない。

「俺は自分のためいやつてるんだ。人のためにもなるんだから言われる筋合いはない」

そういうと藤咲はてのひらで頬を触る。それはとても甘い感じがするが、ヒコノプスに飛ばされた時よりも痛かった。

「バカ! 心配したのよ。この二日間寝ないでずっと

やういうとやまつとつ泣き出しちまつ。感情が高ぶるとすぐ泣くらしー。

ただ、素直にうれしかった。今まで誰にも言えなかつたし、言わなかつたし、苦しかつ

たし。そう思うとふと夢の最後の言葉が蘇る。

「俺もずっと好きだった」

俺はそういうと、藤咲を胸に寄せ抱きしめた。

「皆と同じ様にフラれたら怖かつたし、何よりも面倒なことから逃げていただけだった

んだ。他の男子からの目もあつたし」

藤咲の顔が熱くなっている。熱でもあるのだろうか。おれひらくそれを聞くと殴られそうな気がするから黙つておこう。うん。

「それよりいつ退院できるか知つてる?」

「知らないけど、2・3日以内にできるんじゃない。3日も寝てれば治るでしょ」

「そっか」

そういうと俺は藤咲を促し、車いすに乗せてもらい表に出ようとする。

だが、当然のように許可が下りなかつた。

窓を開けるために藤咲が窓際に立つ。

開けられた窓から庭園がベットからも見え、そこには美しい藤のはなが、みごとに咲き誇つてあざやかな紫いろをしている。

「綺麗だ」

俺がそういうと藤咲はまた顔を赤くする。

「せっかく藤の花が綺麗に咲いてるのにそこに立たれると見えないんだけどさ」

そう言われ藤咲は怒つたよに近くにあつたコップを腹へ投げつけてきた。

「死ぬつて」

腹へ直撃し悶絶する俺をしり目に藤咲は顔を膨らませ何も言わずに帰つていった。

## Hピローグ

### Hピローグ

1

「口づちゃん、そろそろ中韓テストだよ」

「そうだね。でも、いつから外国語のテストが2つだけになつたの？」

俺は中間テストが近いことだけは知つていてる。

「とりあえず、ちょっとノート貸して。今日勉強しないやつでいいから」

俺はカトケンから今日のノートを借りる。

「いつも思うけど、よく授業中にほとんど寝てるのにあんな点数が取れるよね」

「睡眠学習の効果はすさまじいからな」

俺はそういうと大声で笑う。

そしてチャイムがなると相変わらず俺は寝る。  
結局、寝たまま学校を過ぎるのがいつもの日常。

だが、テスト前だけは必死に勉強をする。

眠い目をこすり学校であつても家であつてもひたすらテスト範囲を教科書からノートまで参考書を片手に全て読む。

読んでる時に誰かが話しかけてこよひが基本的に聞こえてない。

「どうか、話しかけられないオーラを出して必死に勉強する。

「あいつ、またテスト前だけ勉強してるが、」  
クラスの男子に言われようが気にしない。少なくともお前ひよりかは点数が良いんだ。

その言葉も俺の場合は馬鹿にされて言われることが少ない。なぜならその後に必ず、いつ

続くからだ。

「普段から勉強しとけばもつとこい点数を取れるのにな  
ほつとけ、と思つが俺でもわかつ思つから何も言わない。カトケン  
から後でクラスのこと

とか聞くとこんな話ばっかりし。

中間テストはまだマシな方で期末になると科目が倍近くになる。  
それだけ田を通すのが  
しんどいことになる。

ちょっと疲れたので息抜きにのびをする。そこへオーラを感じて  
るハズなのに話しかけ  
てくるやつがいる。

「アンタ、短期で勉強しても知識で身につかないわよ」

クラスの委員長をしているこの女は面倒くさいことにかまつてく  
る。

「入院してたんだからしょうがないだろ。必死に勉強をしないと  
点数が赤い方に近づい  
てマズイことになるだろ。授業中に寝てて怒られる事態になつたら  
どうすんだ」

「寝てこられる方がおかしいでしょ。それに普段からやっぱ  
いいでしょ」  
「あーあ、やっぱ面倒くさい。自分でわかつてるつーの。

「とりあえず、今は忙しいから」

俺はそういうとまた勉強する姿勢に変わる。とりあえず、委員長  
はどこへ行つたみたい  
だ。

そんなこんなで学校が終わるとテスト前でバイトはないから家に  
帰り、犬を散歩に連れ  
て行き、一家団欒で夕食を食べ早めに食べる。

入院すると食欲が増えたり減ったりするらしいが俺には影響がなく、前と同じ量を食べ終わり部屋にこもって勉強を始める。教科書とノートを一通りながめ、フォンスを連れて来て一緒に寝始める。

入院してからは親も妹も心配してくれているが、事の発端については家族全員には何も言っていないから知らない。フォンスは居候で家族と見てないから除外の方向で。

「お兄ちゃん寝てる間に鉄骨が刺さるって意外と間抜けだね」なんて笑われている。心配されているはずなのに何で間抜け呼ばわりなんだ。

「よいよウトウトし始め、寝る態勢に入るとタイミング悪く携帯電話がなる。番号を見ると俺は溜め息をつく。

「ただいま、留守にしております。御用件の方はそのまま電源をお切りください。F A Xを送られる方はF AをS Eに代えてお送りください」

「なに馬鹿なこと言つてるのよ。それにストレートすぎるわよ」相手はそうやって少し声が小さくなつていく。

「それで御用件は？」

「えっと、ノートとか貸してほしかったら言つてね。ザッキーが休んでいた間の分はしつかりノートをとつてあるから」

休んでいた分はつてなんだよ。普段はとつてないみたいな言い方だな。だが、それを指摘すると話が長くなりそつだから言わずに心に留めておく。

「カトケンので足りてるからいらないです。徹夜組の俺には時間がないからおやすみなさい」

「徹夜なのにおやすみってちょっと」

途中まで話を聞いただけでおれは通話を切る。何を言いたいのかなんとなくわかるし。

そのまま布団に入つたまま寝転がつて意識が薄れていく。

2

「さて始めますか」

俺はそういうとさつさと机をだし勉強を始める姿勢になる。

夢の中で勉強しても俺には現実に影響を与えるのを使つた勉強法だ。バイトを始めた時に、テスト前のバイトを休める」と夢の中で効率よく勉強するやり方を教えてもらつた

「うことを店長と約束していた。

だからカトケンに言つた睡眠学習は嘘ではなかつたりする。

「さて、教科書とノートでも出すか

ボン、という音と共にだし、ノートの表紙にはカトケンのお気に入りの絵が描かれている。学校でこのノートを広げると誤解されるのは間違いないが、テ

スト前だけしか広げない。学校でこのノートを広げると誤解されるのは間違いないが、テ

「首輪をまた違うのに代えたと思ったらここののか。僕が暇にな

るよ」

「寝てればいいだろ。別に勉強の邪魔だけはしなければ、何をしても良いよって言

つてるんだしさ。邪魔以外ならね

俺はそういうとさつさと勉強を始める。執りかかる。執りかかりたい。始めたい。やりたい。やめさせたい。

「そこ、カリカリするな！ さっきからカリカリ、ホリホリしゃがつて」

「寝る場所作ってるんだよ」

フォンスは短い手で一生懸命穴を掘つて自分の寝床を作つていた。

だが、うるさい。

「ほら、これで寝れるだろ」

市販されているキノコ型ハウスみたいのを出してやると、フォンスはそこに喜んで入つ

て行つて丸くなる。狭いところに丸くなつて寝るのが好きらしい。

「そんだけ狭いところが好きなら、里親に出して狭い家になつても充分に暮らしていけ

そうだな」

寝かけていた目をパチリとあける。

「ずっと穴でも掘つてようか？ アナグマ犬だから掘るの大好きだよ」

「わかった。お前はずっとウチの犬だ」

それ以降グツスリ眠りに入つたらしく、寝息しか聞こえない。

その間に必死に教科書を読み漁り、ノートを見ながら覚える。

この勉強法で一番の難所は理科と数学だ。数学は式を覚えても応用させなければならず、

式の暗記だけじゃどうにもならない。パターンを覚えてもそれだけで完璧には扱えない。

理科に至つては生物のテストだけなら喜んで受けるが、科学と物理はちょっとキツイ。片

方を選択科目から外しといて良かつたと素直に思うが、カトケンは生物を取つてないから

生物は教科書をひたすら読むだけになる。

ということで、文系を後回しにして理系を中心に勉強を進めていかないと手痛い目に会う。数学以外は教師も首を傾げているはずだ。寝ている生徒がなぜ

成績がいいのか、と。

「こうかい。オシッコー」

「勝手にその辺でしてないさい」

「わかった。出してやるから少し待つてろ」

現実と全く同じペットシートを出してやる。フォンスはありがとうというとそこで片足

を上げし始める。そしてまた自分のキノコ型の小屋に入りまた寝始めた。

その様子を見て俺は微笑む。すごくかわいい、とこれがいつもフォンスのしさや寝顔を見ている俺の感想である。

3

そのまま朝になると、竜崎は勉強したこと思い出すしながら、真っ白な問題集に目を通す。ほぼ完ぺきであつた。

これならテストでひどい点数はとらないだろう。そのまま散歩をして学校へ行く。

明日と明後日と別の科目を勉強で繰り返し、テスト前日に問題集をやる。これが竜崎のテスト勉強である。

「明日からテストで今日は半日か

「そうだね。それで勉強ははがどつてる?」

加藤は普段から勉強している余裕からか竜崎を心配して聞いた。

「バツチリ、問題集もほぼ問題ない。カトケンといい勝負になりそうだよ」

「むりむり。ウちゃんは理系が得意じゃないじゃん。一夜漬けだけで絶対に僕には勝てないよ。日々の積み重ねがないとね」

そう言われ竜崎は素直に負けを認めるしかない。

「普段から勉強してる人間と一緒にするなよ」

竜崎はふてくされてそうは言つたものの絶対に加藤の方が正しいので、周囲で一緒に話していたクラスメートたちは呆れていた。そして一同揃つてこう言った。

「普段から勉強をしないお前が悪い」と。

眠い目をこすり必死に勉強をする。テスト前でなければこの光景はまず見られない。

夢の中で3時間程寝てはいるため倒れることはないが、やはり眠いらしい。とうとう寝てしまう。

「おーい。起きる。もう授業終わって担任が入ってくるぞ」

「ううーん

竜崎はグズグズしている。まだ眠いらしい。そこへ藤咲がやってくる。

「起きなさいよ。担任がくるわよ」

「ゴンつと頭を勢いよく殴られた竜崎はすぐ起き上がる。

「いつてーな。何すんだよ」

「起きないアンタが悪い。担任の前で寝てたらこれよつてバイトになるわよ」

竜崎はそれを聞くとおとなしくなった。あの先生なら確かにこれ以上ひどいことになる。

授業中に寝てる分には何も言わないが、ホームルームで寝ると泣き始めて1時間は帰れない。さすがにそれはやつてはいけないことになつてい、クラスではそれを回避するの

に暗黙の了解で無理やりにでも起こすことになつていて。担任が教室に入つてくると話初め。そのまま下校した。

家に帰り勉強をしていると電話がかかってきた。

「なんだよ、今度は睡眠だけじゃなくて勉強も邪魔するのかよ」

「あればザツキーが寝てて、皆が帰れなくなると面倒でしょ？」

だから起こしたのよ」

「あいい。それで用はなに？」

そういうと、藤咲は少し黙り込んでしまった。

「用がないなら切るぞ。普段から勉強している君たちとは違つて

俺には時間がないんだ」

「待つて。テスト終わつたら暇な日あるでしょ。どつかいけないかなつて」

そう言われ龍崎は側にある手帳で予定を確認する。

「あ、あいちゃつてる日があるけど、藤咲は忙しい日だと思つたらたぶんどこかへ行く

のは無理だと思うよ」

「何でザツキーが私の予定を勝手に立ててるのよ。それでいつ？」

「テスト終わつた次の日曜」

「それならカオちゃんと服を買いに行く予定だつたけど、別の日に代えるわ。ママを助けてくれたお礼もしていなかつたし」

「おい、それだけはやつちゃダメだ。おー……」

「それじゃあねえ。バイバーイ」

電話を切られてしまつて龍崎はしづらげ携帯を見つめる。

「やつぱり」

龍崎はしづらげ浮かない顔をした。

「もしもし。日曜日にお姉ちゃんと出かける龍崎さんですか？」

「ノー。ディス、イズ、ア、ペン」

「中学生で習う英語で意味不明な人のフリとかいらないですから

「

「それで、何の用だ」

「えっと、二人が出かけている写真を後ろから撮りたいなあって思いまして」

「おい、それだけはやめろ」

「じゃあ、わかつてますね？」

「どうせ、もう断れないんだろ。それでどんな人なんだ」

「それも当日にしましょう。そっちの方が竜崎さん的にもやりやすいでしょうし」

「テスト終わつた後の翌々日でいいな。テスト当日は友達とカラオケに行くから」

「はい。それでいいですよ。じゃあ、またあのファミレスで」電話を切ると竜崎はまた面倒なことになつたと感じる。

藤咲の妹の花桜梨は悩んでいる友人がいると竜崎へ電話をし、その人と竜崎を合わせ自分がドリンクバーとケーキを食べる。もちろん、お金は竜崎持ちになる。

そして、ファミレスの常連からは、またあいつ違う女を連れていると敵意剥き出しの目で見られる。

竜崎広界は面倒なことがめんどくさがつていて竜崎本人の所へ転がりこんでくる性質で、

藤咲花桜梨は面倒なことを周りの人へ押し付ける性質をもつていてために竜崎がかつこうの餌食になつていて。

退院してからこの一ヶ月で10人以上は話を聞いている。聞き上手な竜崎は相談されるとひたすら話を聞き、解決案をだしてしまつので花桜梨を通じて人が集まつてしまつ。

本人にとつては非常に面倒ではあるが、めんどくさがつて断るともつと面倒なことになる

ので仕方なく花桜梨の話を受けている。

そして藤咲花桜梨からの電話の後は普通に勉強ができる、そのまま寝る時間になり夢の中で問題を解く。夢の中では頭の中に辞書がはいつていろいろなもので、樂々解ける。それを現実の世界に引っ張り出してテストで使うだけである。

テストは終わり、みんなで皿口採点をしてみると竜崎はいつも以上にできがよく、加藤に迫る勢いの点数を出していた。

「5点の差か」

「総合点でカトケンと5点の差じゃ上出来すぎるだろ」

一緒に採点していた彼の友人達から一斉に言われる。

教室でやつた採点会のようなものも終わり、そのまま友人達とカラオケにいき夜まで街を練り歩きそのまま解散した。

翌日には藤咲と遊びにいく予定が入っていた。

竜崎は寝坊すると怒られるから早めに眠り、朝を迎える傘をさし出かけて行く。待ち合わせ場所にはその場だけ太陽が降り注いでいるようなとても輝いている女性が待っていた。

「まず、その服をどうにかしよう。じゃあついてきて」

「え、いいよ。服はこのままで」

「ダメ。せつかくだから買うの！」

竜崎はそのまま女性に手を握られ引っ張られ電車に乗り都心へ行く。

その日、一日中手を引っ張っていた彼女は笑顔でいた。その傍らで彼はその笑顔を見て

このまま楽しい時が続いてほしいと願う。

そして、日が暮れ別れの時が来ると、丁字路で竜崎たちはこんな

会話をした。

「今度は晴れてる日に行きたいね。海の見える公園とか」

彼女はそう言った。

「そうだね。晴れてる日と一緒に行こつか」

「うん」

竜崎は素直にまた会いたいといつ気持ちを表し、彼女の体を自分の傘の中へ引き寄せ抱きしめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8809y/>

---

枕営業

2011年11月26日16時47分発行